

k-529

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第33集

# 大浦

大浦C遺跡発掘調査報告書

平成4年3月

米沢市教育委員会

おお うら  
大 浦

大浦C遺跡発掘調査報告書

平成4年3月

米沢市教育委員会



## 序 文

この報告書は、個人の圃場整備に伴って平成2年と3年の2ヶ年にわたって実施した、緊急発掘調査の成果をまとめたものです。

本遺跡が所在する大浦地区は、本市の北東部にあり、綠豊かな田園地帯でしたが、市の都市計画事業によって、周辺の土地区画整理が行われたことにより、今では市街地への北側の玄関口として、市内でも交通量の多い所となっております。

大浦地区に初めて遺跡が確認されたのは昭和59年のことで、今年度までに10度の調査が行われておりますが、現在までに大浦A～Dの四つの遺跡で構成された大浦遺跡群としてその存在が認識されており、遺跡の範囲は約18万m<sup>2</sup>という広大な面積を有するものと推測されています。

本遺跡と隣接した大浦B遺跡では、平成2年度から3ヶ年の継続事業として国庫補助を受け、学術調査を実施しておりますが、柵列で囲まれた施設群の他、土壌内から漆紙文書（延暦23年の具注暦）が検出されたことにより、「置賜郡衙」と密接な関係をもつ遺跡として注目されるところとなりました。

このたびの大浦C遺跡調査からは複数の年代にわたる遺構が検出されておりますが、特に奈良期については、柵列で区画され、整然と配置された掘立柱建物跡が検出され、遺物についても、当時大変高級で、特定の建物にしか使用されていなかった布目瓦の破片が出土するなど、規模としては小さいものの、大浦B遺跡との類似性が認められ、本遺跡もまた、郡衙の一部として機能していた施設であったとみられています。

のことにより、大浦A～Cの各遺跡が「置賜郡衙の領域」として一括される可能性がますます強くなり、今後の調査によって、遺跡の全容が明らかになることと思われ、大いに期待するものです。

最後になりましたが、本調査につきまして格別の御指導、御協力を賜りました文化庁、山形県教育庁文化課をはじめ、関係各位、並びに地権者、地元の皆様に対し、心から御礼申し上げます。

平成4年3月

米沢市教育委員会

教育長 小口豆



## 例　　言

1. 本報告書は米沢市教育委員会が個人の面接整備に伴い、平成2年から平成3年度までの2ヶ年にわたって調査した緊急発掘調査報告書である。なお、平成2年度については市の単独事業として実施し、平成3年度については国庫補助事業として、国から50%の補助金を得て実施した。

2. 遺跡の所在地は、山形県米沢市中田町字大浦二510他である。

3. 調査期間 (平成2年度) 平成2年4月20日～同年5月31日

平成2年7月12日～同年9月14日

(平成3年度) 平成3年4月22日～同年7月26日

4. 調査体制は下記の通りである。

(平成2年度)

調査主体 米沢市教育委員会

調査総括 小間 薫(文化課長)

調査担当 手塚 孝

調査主任 山田 隆、菊地政信

調査副主任 石渡 順

調査補助員 赤木博幸、原 三郎

作業員 青木 操、赤木みや、五十嵐幸子

五十嵐 拓、遠藤昭一、遠藤忠一

遠藤とみの、北川菊二、小間とき子

後藤藤市、柴崎 造、菅野泰之

武田房次郎、田巻修一、出口孝藏

中島国雄、野村伸作、皆川清助

諸橋正一、柳町昌孝、八巻慶一

八巻 久、横内昌彦、渡辺秀利

事務局 木村琢美、小林伸一、船山弘行

調査指導 山形県教育庁文化課

調査協力 遠藤庄四郎、中村幸男

(平成3年度)

調査主体 米沢市教育委員会

調査総括 小間 薫(文化課長)

調査担当 手塚 孝

調査主任 山田 隆

調査副主任 星 努

作業員 阿部弘志、安部廣一、石井よそ子

内田 充、遠藤忠一、小野寺弘貴

大塚勢蔵、菊地芳子、佐々木隆丞

佐藤太郎、佐藤由佳子、沢田トミ

柴田 晚、清水ミツ、壇上直巳

平山幸治、藤村徳寿、前田康夫

松本三郎、皆川清助、宮越博章

村田敏春、柳町昌孝、山田博喜

横倉さおり、我妻とく、渡部典子

事務局 木村琢美、小林伸一、平間洋子

調査指導 山形県教育庁文化課

調査協力 遠藤庄四郎、草刈広一、中根猛彦

(敬称略)

5. 大浦の調査については、大浦遺跡群として発掘回数を累計しているため、本市では平成2年度調査を第V次調査、平成3年度調査を第VI次調査としているが、本報告書においては、平成2年度調査を第1次調査、平成3年度調査を第2次調査とした。
6. 掘図縮尺は、遺構については、1／50・1／80・1／100・1／120、遺物については1／3を基本とし、それぞれにスケールを示した。但し、遺構図面中の遺物については、土壌内出土のものは1／4、溝状遺構内出土のものは1／6とする。写真図版については縮尺不同とし、遺物写真的番号は、遺物実測図の番号に対応している。
7. 文中、挿図中の記号は、G—グリッド、BY—掘立柱建物跡、DY—土壌、KY—溝状遺構、OY—墓壙、PY—ピット、SY—集石遺構、TY—柱穴、DN—井戸跡、NN—池状遺構、ON—柵列、AZ—土器、BZ—石器、DZ—鉄製品、EZ—石製品、GZ—木製品、HZ—陶磁器、NZ—漆製品、QZ—その他、F—覆土、S—石を示す。
8. 挿図中の方位は真北に合わせ、グリッドの各マス目の番号は、西北の数字で表わす。
9. 本遺跡より出土した遺物については、整理、復元し、米沢市埋蔵文化財資料室（米沢市万世町桑山200）に一括保管している。
10. 本報告書の作成については、手塚 孝、山田 隆が担当し、編集を山田が行ったが、全体は手塚が総括した。責任校正は小林伸一がその責務にあたった。
11. 昆虫遺体の鑑定については、本市の昆虫研究家草刈広一氏、中根猛彦博士よりご教示を賜った。なお、大浦C遺跡出土昆虫遺体については、草刈広一氏から特別寄稿を賜った。記して感謝したい。

# 本 文 目 次

(表紙題字は米沢市教育委員会教育長 小口 亘による)

序 文	3. 近世の遺構	15
例 言	III 検出された遺物	22
目 次	1. 縄文期の遺物	22
I 遺跡の概観と調査の経緯	2	
1. 遺跡の立地と環境	2	
2. 調査に至るまでの経過	2	
3. 調査の経緯	4	
II 検出された遺構	5	
1. 奈良時代の遺構	5	
・掘立柱建物跡	5	
・BY 3	5	3. 中・近世の遺物
・BY 7	5	1) 土 堀
・BY107	5	2) 陶磁器
・BY110	5	・a擂鉢
・BY 1	5	・b皿
・BY 4	8	・c水差
・BY 5・6	8	・d香炉
・BY112	8	・e磁器
・BY108	8	3) 木 器
・BY39	8	・a椀類
・BY111	8	・b木製用具
・ON109	8	・c下駄
・池状遺構	8	4) 古 錢
・土壤	15	IV 総 括
・溝状遺構	15	特別寄稿
2. 中世の遺構	15	大浦C遺跡から出土した昆虫遺体
・建物跡	15	大浦C遺跡出土の昆虫遺体写真

## 挿 図 目 次

第1図 大浦C遺跡位置図 .....	1	第15図 KY 2 平面図(2) .....	20
第2図 グリッド配置図 .....	3	第16図 KY 2 平面図(3) .....	21
第3図 第Ⅰ期掘立柱建物跡(1) .....	6	第17図 出土遺物実測図(1) .....	23
第4図 第Ⅰ期掘立柱建物跡(2) .....	7	第18図 出土須恵器拓影図(1) .....	25
第5図 第Ⅱ期掘立柱建物跡(1) .....	9	第19図 出土須恵器拓影図(2) .....	26
第6図 第Ⅱ期掘立柱建物跡(2) .....	10	第20図 出土須恵器拓影図(3) .....	27
第7図 第Ⅱ期掘立柱建物跡(3) .....	11	第21図 出土遺物実測図(2) .....	29
第8図 掘立柱建物跡柱穴土層断面図(1) ..	12	第22図 出土遺物実測図(3) .....	30
第9図 掘立柱建物跡柱穴土層断面図(2) ..	13	第23図 出土遺物実測図(4) .....	31
第10図 NN11~NN13平面図 .....	14	第24図 出土遺物実測図(5) .....	33
第11図 土壙平面図 .....	16	第25図 出土遺物実測図(6) .....	34
第12図 KY88平面図 .....	17	第26図 出土遺物実測図(7) .....	35
第13図 溝状造構平面図 .....	18	第27図 造構全体図 .....	37
第14図 KY 2 平面図(1) .....	19	第28図 大浦B遺跡造構全体図 .....	38

## 図 版 目 次

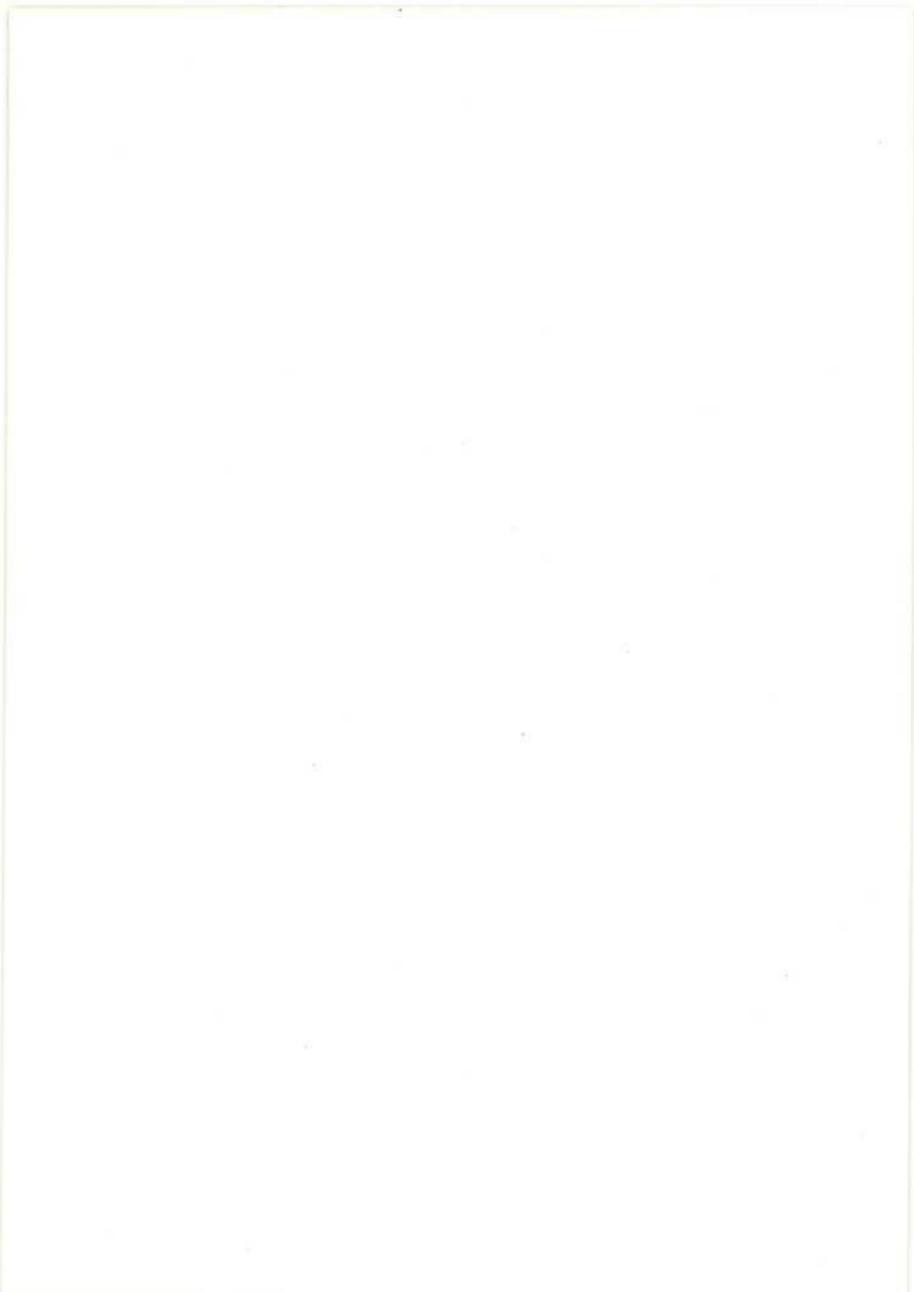
卷頭図版 平成 2 年度調査区全景	第十一図版 大浦C遺跡出土の遺物(6)
平成 3 年度調査区全景	第十二図版 大浦C遺跡出土の遺物(7)
第一図版 大浦C遺跡第一次調査の発掘(1)	
第二図版 大浦C遺跡第一次調査の発掘(2)	附図 1 大浦C遺跡平成 3 年度調査区造構全体図
第三図版 大浦C遺跡第二次調査の発掘(1)	附図 2 大浦C遺跡造構全体図
第四図版 大浦C遺跡第二次調査の発掘(2)	
第五図版 大浦C遺跡遺物出土状況	
第六図版 大浦C遺跡出土の遺物(1)	
第七図版 大浦C遺跡出土の遺物(2)	
第八図版 大浦C遺跡出土の遺物(3)	
第九図版 大浦C遺跡出土の遺物(4)	
第十図版 大浦C遺跡出土の遺物(5)	

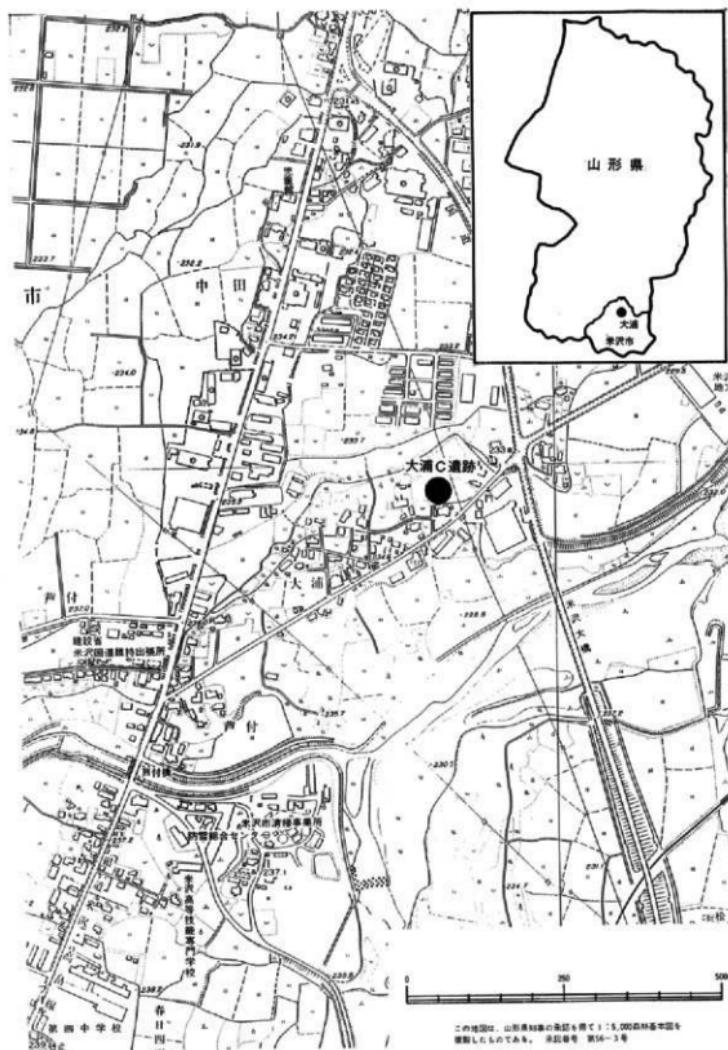


▲ 平成 2 年度調査区全景



▲ 平成 3 年度調査区全景





第1図 大浦C遺跡位置図

## I 遺跡の概観と調査の経緯

### 1. 遺跡の立地と環境（第1図）

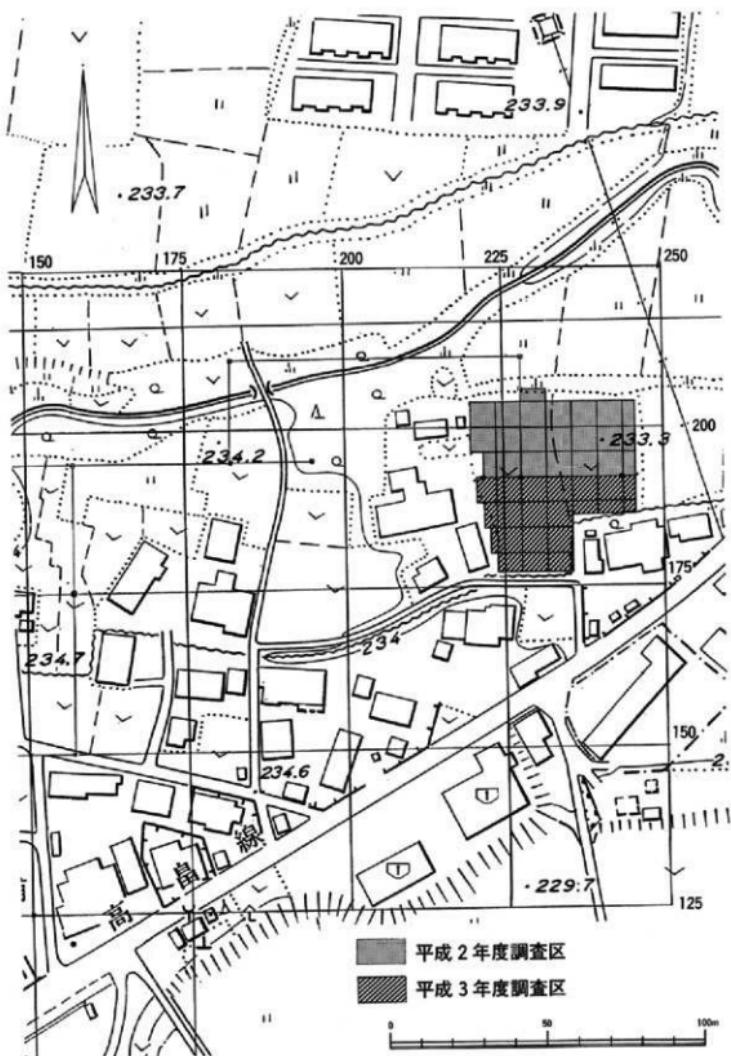
本遺跡は、米沢市街の北東に位置し、米沢市役所から約2kmの距離にあり、米沢市中田町字大浦二510他に所在する。遺跡の西を堀立川、南を松川（最上川）、東を羽黒川が流れ、遺跡の南約400m地点で松川と堀立川が合流し、さらに東側約600m地点で羽黒川が合流している。遺跡はこれら3河川によって形成された河岸段丘と北側を東西に横断する小規模な旧河川の一次的な河岸段丘上に立地しており、標高は約233mを測る。西から東に向かうにつれて標高がやや低くなり、河川との比高差は7mである。本遺跡は西に隣接する大浦B、南の大浦A、それに旧河川の対岸に位置する大浦Dの3遺跡とともに大浦遺跡群を構成しており、大浦遺跡群の総面積は東西約600m、南北約300mの約180,000m<sup>2</sup>を有するものと推測される。特に、3河川と旧河川によって区画された、東西に伸びる自然堤防状の微高台地内にある大浦A、B、C遺跡は、一括されるものと思われる。遺跡周辺の環境としては、まだ水田や畠などを残しているものの、遺跡群を東西に分断する形で県道が走っており、また昭和62年に市街地からの道路が接続されたことに伴い、米沢市街地への北側玄関口として市内でも交通量の多い所となったことから、郊外型の店舗の進出が著しく、ここ2、3年で環境が激変している地域である。

### 2. 調査に至るまでの経過

米沢市教育委員会は昭和61年に市内の遺跡分布を示した「米沢市遺跡地図」を刊行し、遺跡保護の基準をしているが、昭和56年～57年に行った遺跡分布調査の際には、大浦地区は遺跡の範囲外と認識されていた。大浦遺跡群が初めて認識されたのは、昭和59年に、今回の調査区の東側に隣接する店舗の駐車場が造成された際、遺構、遺物が確認されたことによる。以来、大浦遺跡群は今年度までに10度の調査が行われ、今回の調査は本遺跡に関する4度目の調査となった。

大浦遺跡群は今までの調査結果から、縄文時代から現代まで連続する複合遺跡であることが判明しているが、特に、平成元年と2年の2ヶ年にわたって調査したB遺跡から、正倉院と思われる建物跡が確認されると共に、土壌内から漆紙文書（具注曆）が検出されたことにより、置賜郡衙の存在を決定づけるものとして注目されるところとなった。

今回の調査は個人の圃場整備に伴う緊急の調査であり、総面積は2,542m<sup>2</sup>である。地権者との協議を行った結果、調査は2ヶ年にわたって行うものとし、市教育委員会が主体となり遺跡の記録保存を図ることになったものである。昭和59年の調査の際に確認された遺構が、開発範囲に確實に伸びていることから、全面を調査対象区域とし、初年度は市の単独事業として北半分にあたる約1,200m<sup>2</sup>の調査を実施することとし、次年度は国庫補助事業としての採択を受け、残りの部分である南半分の約1,100m<sup>2</sup>の調査を実施することとした。（第2図）



第2図 大浦C遺跡グリッド配置図

### 3. 調査の経過

#### 第1次調査（平成2年度）

調査はグリッド設定から入る。平成元年度の大浦B遺跡調査で設定した基準点を基に延長し、東西に220～246、南北に192～204からなる範囲を調査区とした。南北方向の座標軸は真北に合わせ、グリッドの単位は8×8mを基本とした。（第2図）

重機を用い表土の除去を4月20日に行い、それと並行して北東のグリッドから順次手掘りにより面整理を行った。その後、掘り下げ、面削りを重ね、遺構・遺物確認面及びその範囲の把握を行い、5月8日までに概ね確認し、翌日から確認した溝状遺構、土壌等の掘り下げに着手した。

調査は予定通りに進んでいたが、6月に緊急を要する米沢城の調査が計画され、やむなく5月31日をもって一時中断し、遺構全体をビニールシートで覆って遺構の保護に努めた。

7月12日から調査を再開する。調査区の中央を南北に分断する中世の大型溝状遺構KY2を中心に、同じく中世期に属すると考えられる他の溝状遺構の掘り下げを進めた。また、KY2の北側部分について遺構の広がりを確認するため、8月1日に新たに8×4mの拡張区を設定した。

遺構・遺物の記録作業は掘り下げと並行して隨時実施し、中世期遺構の掘り下げを終了した時点で、奈良期の遺構掘り下げに入り、最後に掘立柱建物跡の柱穴半截を行った。遺構の掘り下げは8月24日では終了した。8月28日にラジコンヘリコプターにより遺構の全体写真撮影を行いローリングタワーから各遺構別の部分撮影を行った後、平面実測・レベリング等の作業に入り、9月5日の現地説明会を経て、9月14日に平成2年度の調査を終了した。

#### 第2次調査（平成3年度）

調査にあたり、まず、昨年度の調査区から基準杭を移動し、昨年度の調査区を排土で埋め戻した後、4月22日から今年度調査区の表土を重機にて除去した。表土を除去した後、移動していた基準杭からグリッドを設定し、昨年度の調査区に続く形で東西に221～246、南北に192～177からなる範囲を調査区とした。グリッドの単位は昨年同様8×8mを基本とした。（第2図）

南西のグリッドから順次面整理を行い、遺構・遺物確認面及びその範囲の把握を行ったことにより、掘立柱建物跡、溝状遺構、土壌等の各プランを確認した。確認した遺構の中には、昨年検出した大型溝状遺構のKY2や、昭和59年に検出した溝状遺構の統きの部分が認められた。

5月1日からKY2を中心に遺構の掘り下げを行い、遺構・遺物の記録作業も並行して隨時実施した。遺構の掘り下げは6月28日では終了した。7月4日にラジコンヘリコプター等により遺構の全体写真撮影、遺構別の部分撮影を行った後、掘立柱建物跡の柱穴半截を行った。5日に現地説明会を開催し、翌日から平面実測、レベリング等の記録中心の作業に入ったが、例年にない長雨でしばしば調査の中止を余儀なくされ、7月26日によろしく調査の全日程を終了した。

## II 検出された遺構

大浦C遺跡から検出された遺構は奈良、中世、近世期のおおむね3時期にわたって認められる。この中で特に奈良期に属する遺構である掘立柱建物群は「コ」の字状に配置されており、大浦B遺跡との関連性も含め注目される。ここでは上記の3時期に区別して述べることにする。

### 1. 奈良時代の遺構

#### ・掘立柱建物跡 [第3図～第7図]

柱穴の切り合い状況から2時期に区分され、Ⅰ期4棟、Ⅱ期7棟の計11棟が認められている。前者のⅠ期は東西長の3間×5間のBY3と3間×4間のBY7の2棟を主要建物跡とし、南北長の3間×4間（？）のBY107と3間×4間のBY110を上下に配して「L」字状に構成している。柱穴の大きさは掘り方が40cm～70cmで、方形および楕円プランを示し、18cm～25cmの柱痕跡を有している。一部中世のKY2、KY88に切られているものの、確認することは困難ではなかった。Ⅰ期の各建物跡の概要は次の様になる。

#### ・BY3（第3図）

東西長の建物で、西側の一部がKY2によって切られている。不整の円形及び楕円形の掘り方を呈し、桁行東西5間（7尺×6尺×6尺×6尺×7尺）、梁行南北3間（7尺×6尺×7尺）と桁行、梁行とも両端を7尺、中を6尺で構築している。

#### ・BY7（第3図）

BY3の東に3間（5.4m）離れて存在するもので、同一の主軸を示している。桁行東西4間（8尺×7尺×7尺×8尺）で、梁行南北3間（7尺×6尺×7尺）とBY3と同じく両端の間尺を1尺開くのを特徴としている。

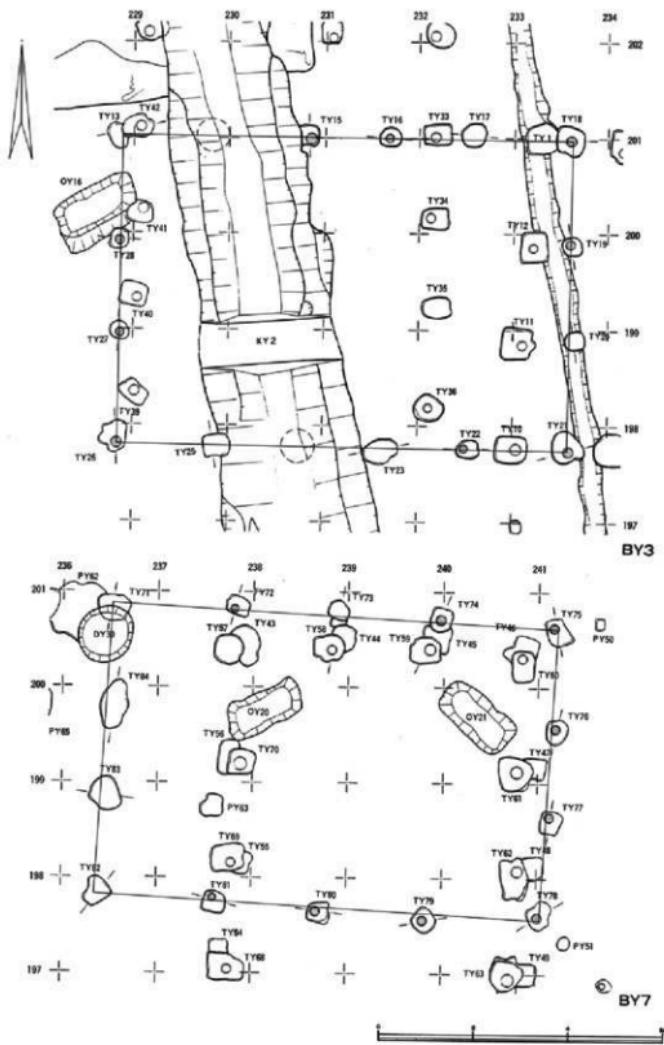
#### ・BY107（第4図）

南北長の建物で東側をKY2、北側をKY17に切られている。不整の方形もしくは長方形プランの掘り方を呈しており、桁行は南北4間（7尺×7尺×7尺×5尺？）、梁行東西3間（7尺×6尺×7尺？）となる。ただし、桁行の南端1間が2尺程詰めた5尺を有するのは気にかかるところである。

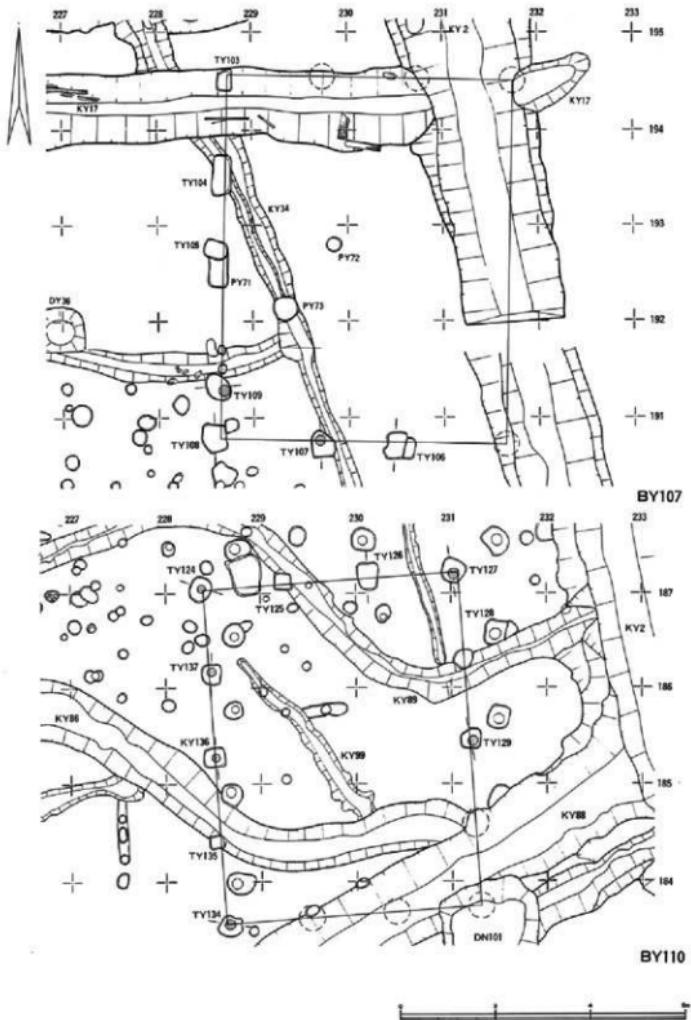
#### ・BY110（第4図）

先のBY107より南に約4間（7.8m）離れた南北長の建物である。南東部が、KY88に切られているが、桁行4間（6尺等間隔）、梁行3間（6尺等間隔）をなす。

後者のⅡ期の建物は東西長のBY3、BY7の建物を建て替えし、南北長のBY1、BY4、BY5・6の3棟の建物を主要建物として、南のBY111、BY112、BY108、北のBY39の7棟を「コ」の字状に配している。Ⅱ期の各建物の概要は次の様になる。



### 第3図 大浦C遺跡第I期掘立柱建物跡(1)



第4図 大浦C遺跡第I期掘立柱建物(2)

・BY1 (第5図)

I期のBY3の跡に建て替えたもので、桁行南北3間（7尺等間隔）、梁行東西3間（5尺等間隔）の建物跡である。同じ3間であるが、梁行の1間を2尺詰めることで南北長の建物を構成している。掘り方は50cm～70cmの方形プランを基本とする。

・BY4 (第5図)

先のBY3より1間西に離して構築したもので、桁行南北4間（7尺×6尺×6尺×7尺）、梁行3間（7尺×6尺？×7尺？）と両端の間尺を広げている。柱の掘り方は長方形及び梢円形で、60cm前後を示している。

・BY5・6 (第6図)

BY1の東2.5間（4.5m）に位置する。南北長を有する桁行4間、梁行3間の建物で、II期の範疇で2度の建て替えを行なっている。先のBY5は桁行南北4間（8尺×7尺×7尺×8尺）であるのに対し、BY6は7尺等間隔となる。梁行もBY5は6尺×5尺×6尺の3間であるのに対し、BY6は5尺等間隔で、新しいBY6が旧BY5よりも南北東西間を2尺詰めて構築している。

・BY112

BY107を建て替えた建物跡である。切り合い関係から南北4間×東西3間と、ほぼ旧建物と同規模である。

・BY108 (第7図)

BY110の後に建て替えた建物跡で、旧BY110が南北4間、東西3間であったのに対し、南北桁行4間（6尺等間隔）と梁行東西2間（8尺等間隔）となる。

・BY39 (第6図)

BY5・6の北4.2mに位置するもので、北側の一部が未調査ではあるが2間×2間の総柱の倉庫跡と考えられる。間尺は東西が6尺、南北が5尺で東西長の建物である。

・BY111 (第7図)

BY5・6の南側に位置するII期に伴う建物跡で、桁行南北3間（6尺等間隔）、梁行東西2間（8尺等間隔）を有する。掘り方は不整の方形及び円形プランを示し、45cm～62cmを測る。

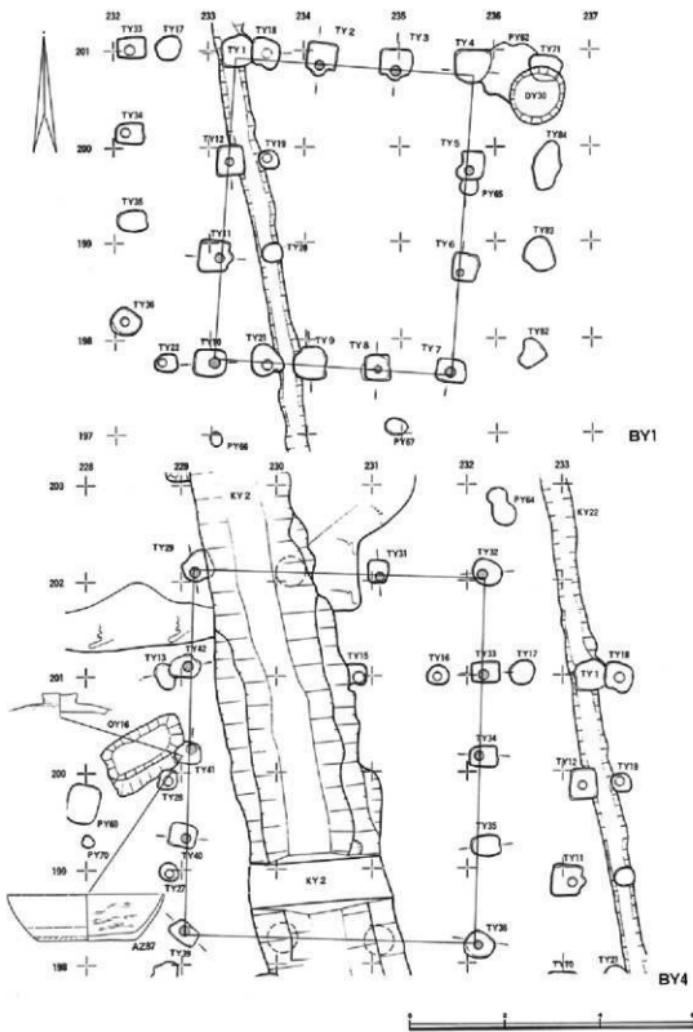
・ON109

I期とII期の建物群の西側に配された構列群で、部分的に確認されたものである。I期のBY107とBY110、II期のBY112、BY108に隣接して残っており、これらの建物跡だけに伴うものか、大浦B遺跡のように全周するものかは判らない。

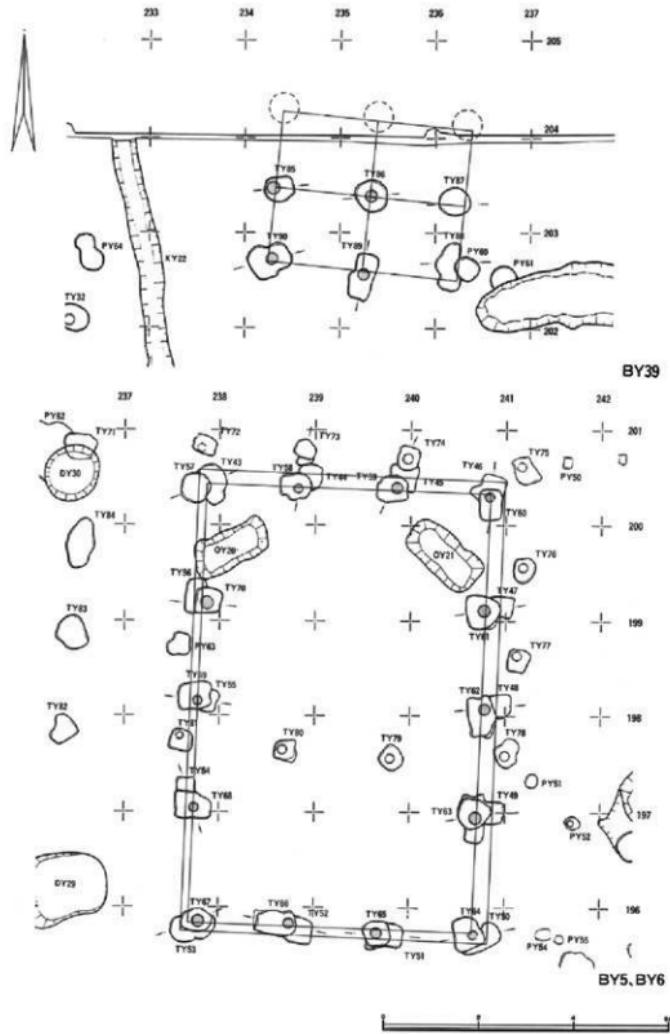
柱穴はここであえて触れないが、第8図と第9図に各建物跡の断面図を示しておいた。

・池状造構（第10図）

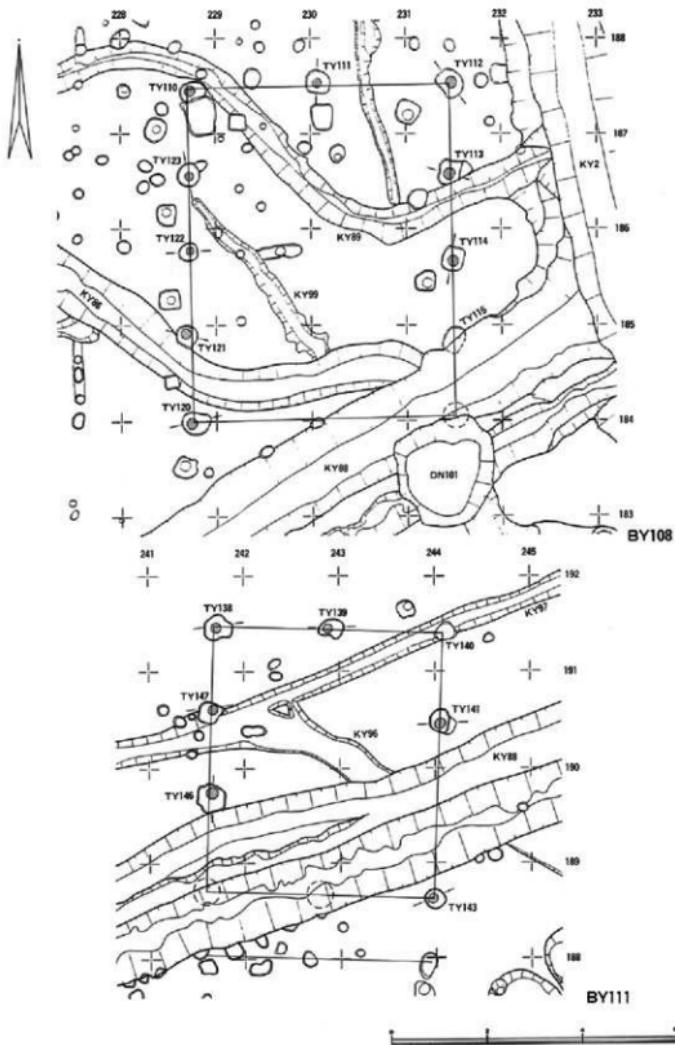
調査区の北西隅より検出されたものでNN11～NN13の3基ある。いずれも不整の円形及び梢円形プランを示し、NN11は長径5.3m×短径3.4m、NN13が長径6.3m×短径3.5m、NN12が長径5.1m×短径4.2mを測り、いずれも深さ15cm～30cmと浅いのが特徴である。覆土は泥炭層を中心に多量



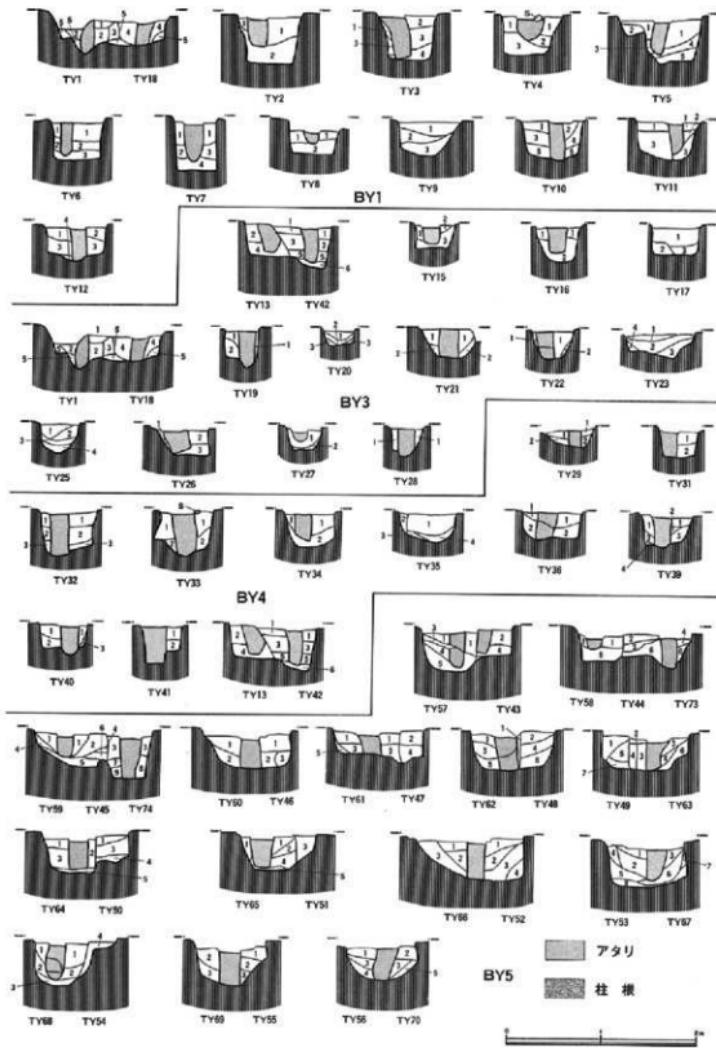
第5図 大浦C遺跡第Ⅱ期掘立柱建物(1)



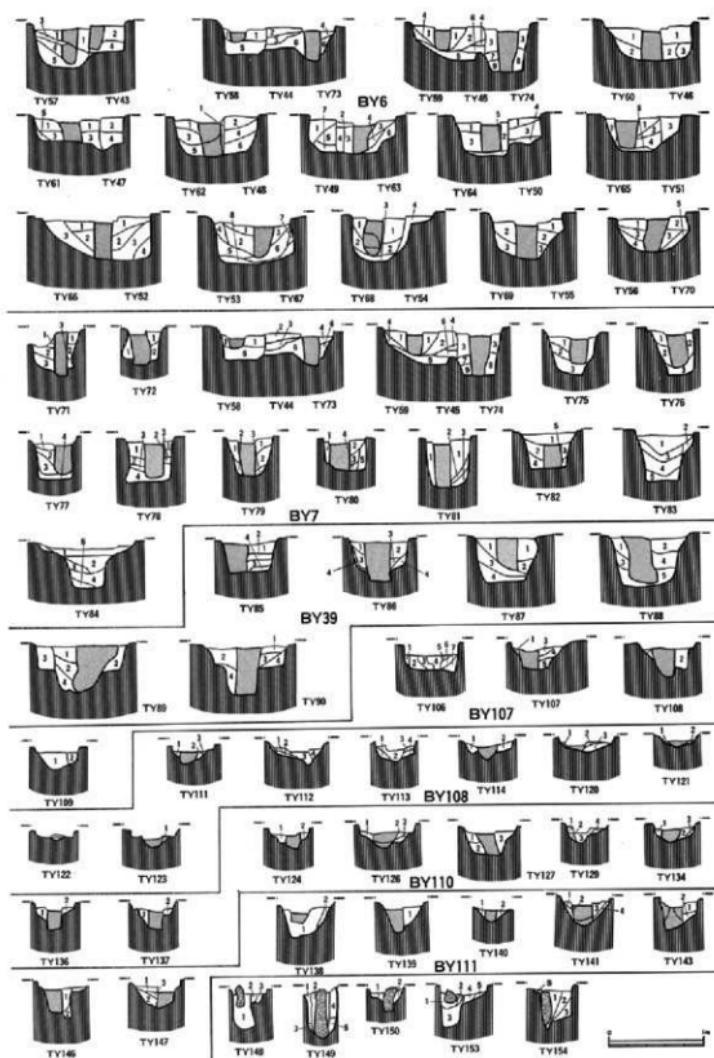
第6図 大溝C遺跡第Ⅱ期掘立柱建物跡(2)



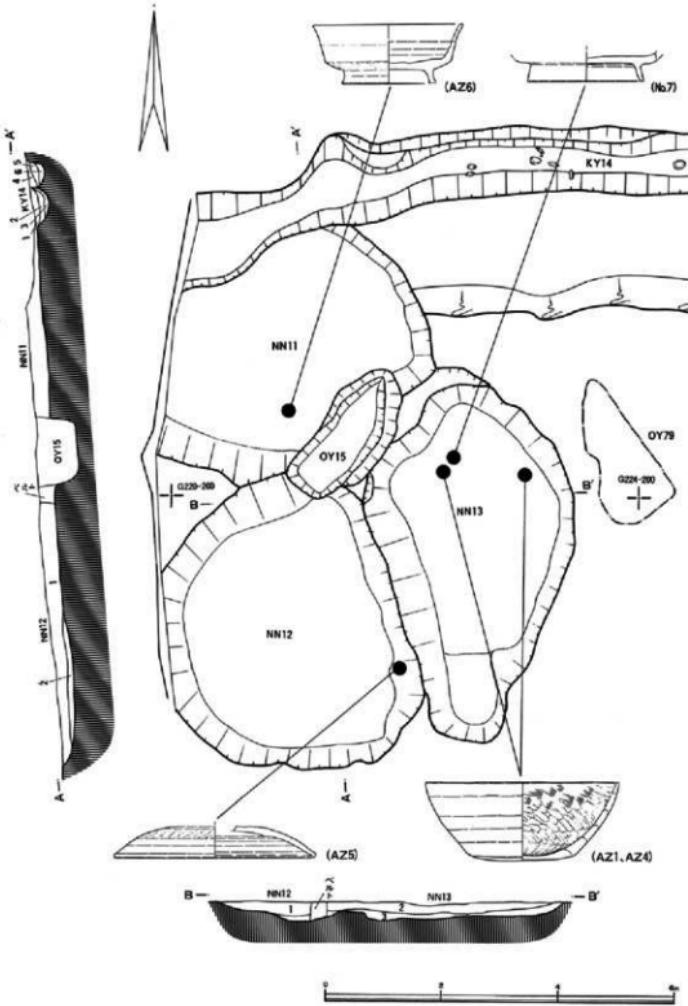
### 第7図 大溝C遺跡第Ⅱ期掘立柱建物跡(3)



第8図 大浦C遺跡掘立柱建物跡柱穴土層断面図(1)



第9図 大浦C遺跡掘立柱建物跡柱穴土層断面図(2)



第10図 大浦C遺跡NN11~NN13平面図

の木炭と焼土が認められた。遺物は破片がほとんどで、土師器壺、須恵器壺、蓋が検出されている。一見、切り合っている様にもみえるが意図的に隣接させている。

#### ・土壤（第11図）

BY 5・6の東側に7基、BY111の南東側に5基、BY 1の東側に2基の計14基がある。この中には不整形で3m前後の浅いDY 9、DY94、DY10のグループと1m前後のDY90、DY31他の小規模のグループとがある。前者は先の池状遺構と同じく木炭、焼土が混入しているが、後者はDY90の様に一括土器が埋納されている場合が多くみられた。

#### ・溝状遺構（第12図・第13図）

BY 5・6の北側に東西長に延びるKY 8、池状遺構の北側に接するKY14とKY88（旧）の3基がある。KY88はかつて大浦遺跡の第1次調査で木簡が検出された溝跡で、Ⅰ期の建物構築直前まで機能していた。KY 2の西側は中世に偶然旧KY88を掘り下げてKY88（新）を設けたものである。KY 8、KY14はⅡ期の建物の廃絶直後に掘られたものと考えている。

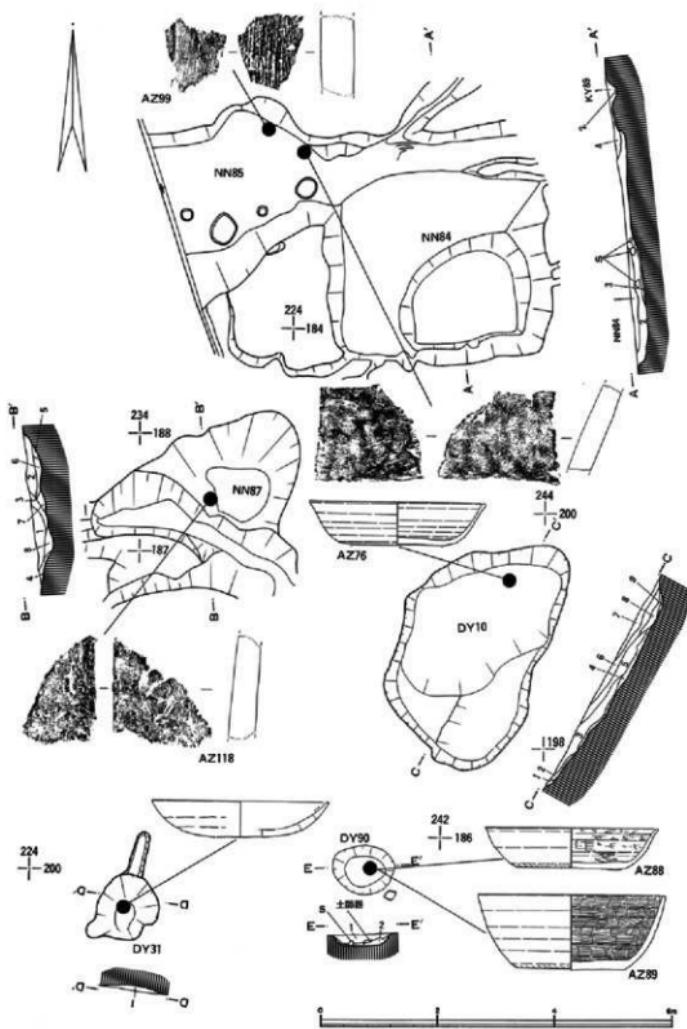
## 2. 中世の遺構（第14図～16図）

KY 2の箱堀とKY88の新、KY18、KY22それに多数の柱穴からなる。KY 2は多量の遺物が検出された溝跡で、全長で58m確認された。調査区の南寄りに虎口を有し、北側に旧河川と接続した人工状の広がりと旧河川跡がみられた。層位は確認面から底面まで、Ⅰ～Ⅲ層面からは江戸前半の遺物、Ⅳ～Ⅶ層内から堀が機能していた年代を示す遺物が検出されている。溝の形状は上端が崩れていますが、箱堀の仲間とみられる。幅は160cm～320cm、深さ53cm～149cmをなす。この堀内の堆積層はⅠ層、Ⅱ層を除くとすべて自然堆積層であり、堀の機能を失ったⅢ層段階で埋め戻されている。埋め土は粘土と黒土を版築したもので、Ⅰ層とⅡ層がこれにあたる。

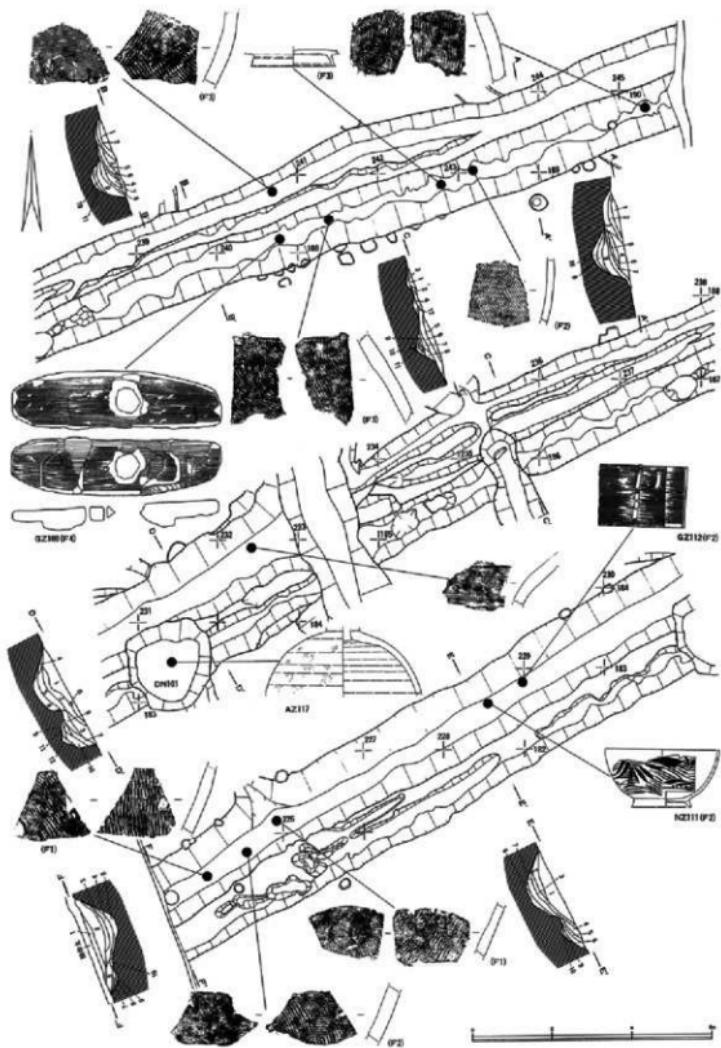
このKY 2に接続する溝跡として、KY18とKY88新がある。KY18はKY 2とはほぼ直角に交わるもので、幅124cm～168cm、深さ15cm～45cmをなす。KY88新はかつての旧KY88に偶然重なって掘り込んだものであり、幅180cm前後、深さ50cmの箱堀である。またKY 2の東側に平行する幅40cm位の浅いKY22も中世期に属するものと考えられ、KY 2との間隔から想定すれば、土星の下に掘られた溝の可能性もある。

#### ・建物跡

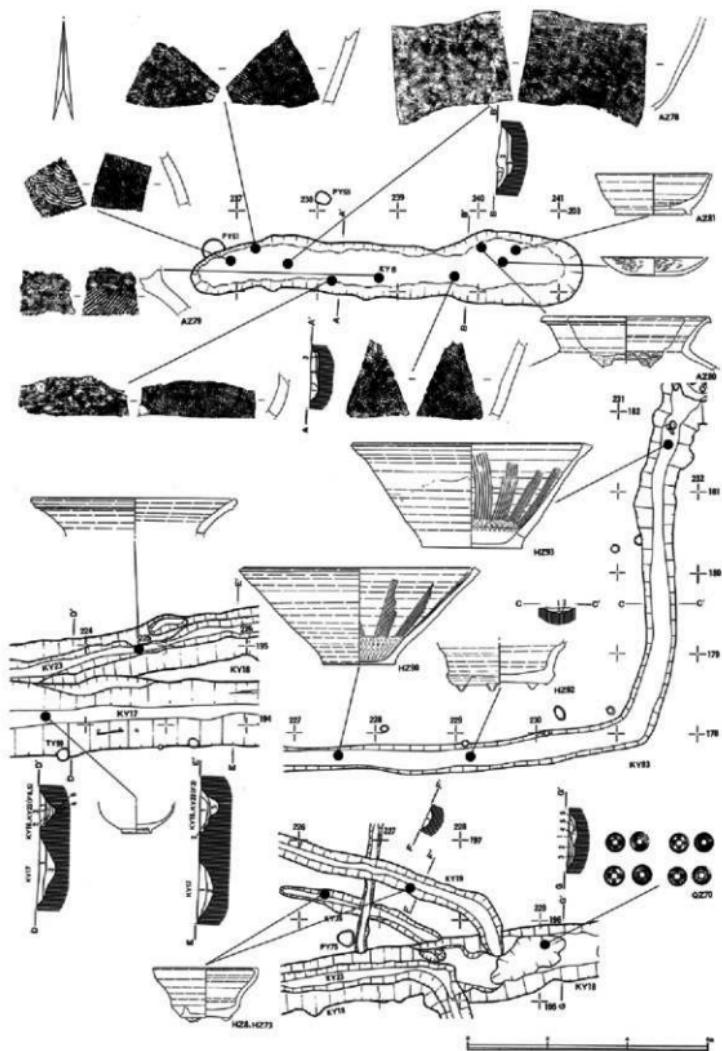
KY 2に接続するKY18とKY88新の空間を中心に548基の柱穴群が検出されている。すべて円形プランを示す柱穴は互いに切り合い関係を呈しており、7～9期（回）の建て替えしを行なっている。柱穴は15cm～50cmで、一部柱痕跡や柱根も検出されているが、切り合いが著しく、建物としての存在は残念ながら確認するまでは至らなかった。



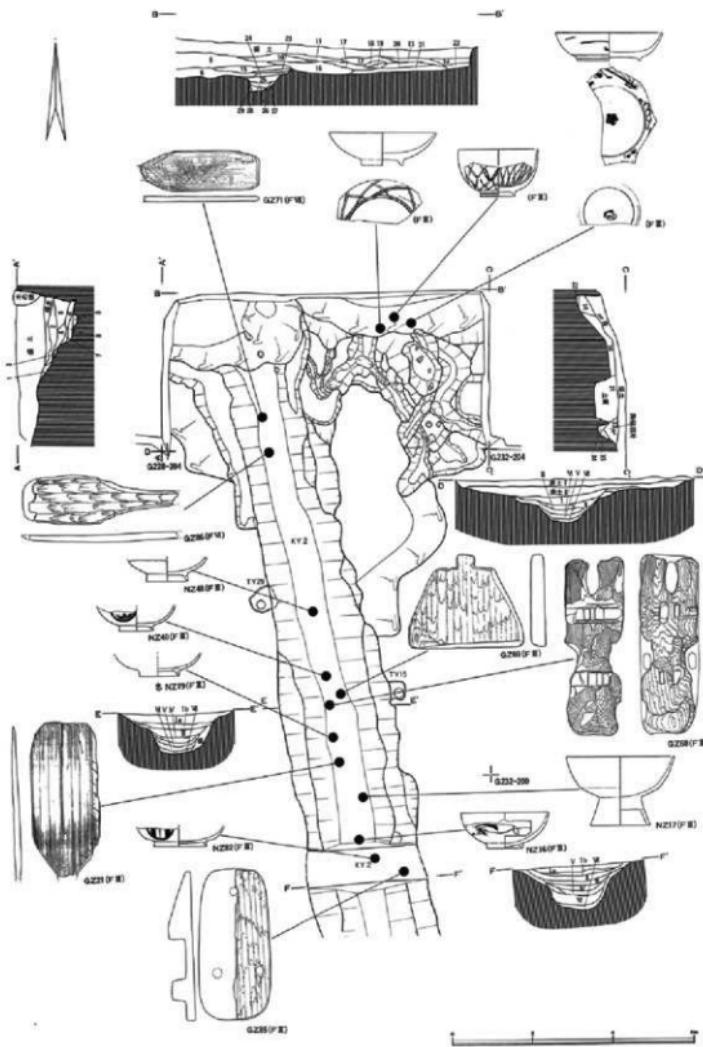
第11図 大浦C道路土壤平面図



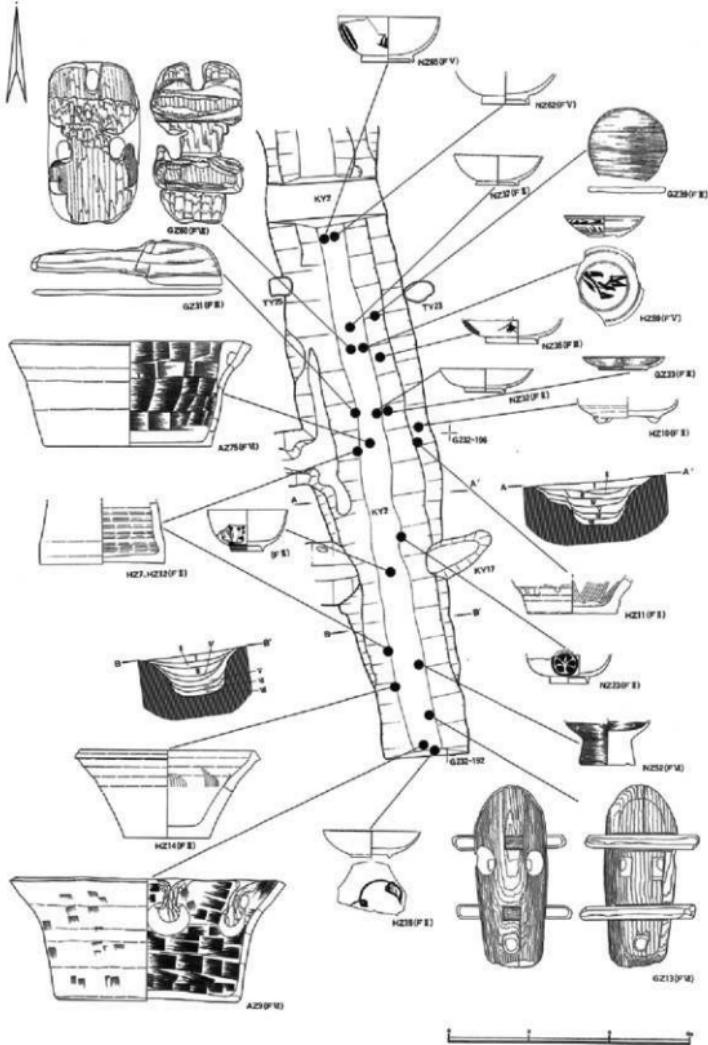
第12図 大浦C遺跡KY88平面図



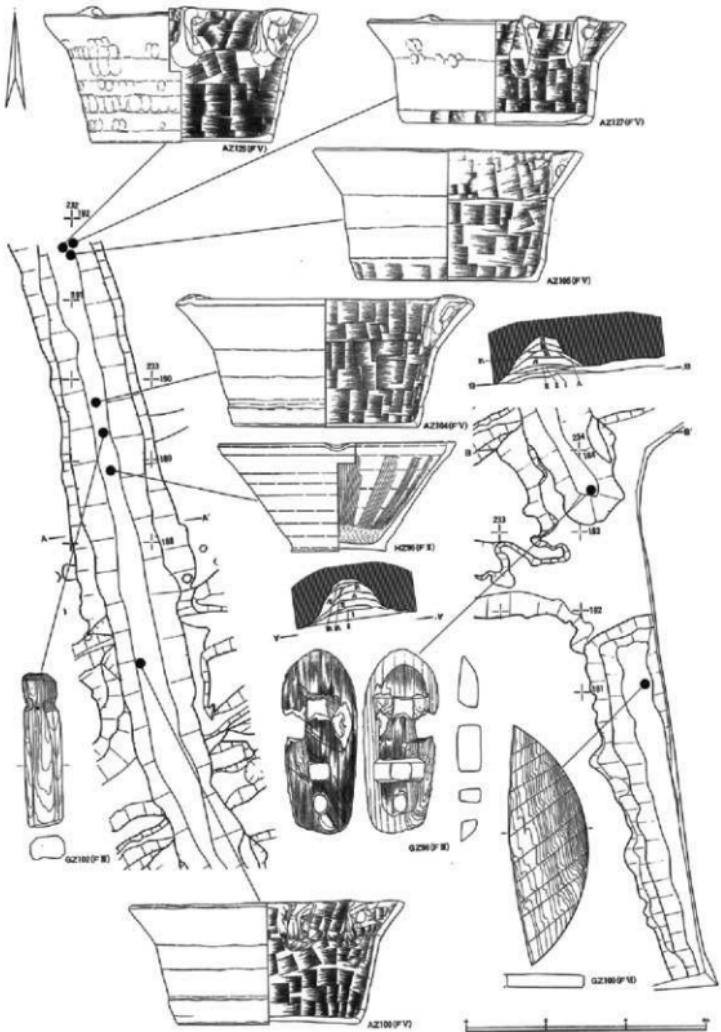
第13圖 大浦C遺跡溝狀遺構平面圖



第14図 大浦C遺跡KY2平面図(1)



第15図 大浦C遺跡KY2平面図(2)



第16図 大浦C遺跡KY2平面図(3)

### 3. 近世の遺構

KY 2 を境にして西側に集中して確認された。KY17、19、23、24、32～35、83、86、89、99、102、105、106の15基の溝状遺構とOY16、20、21、79の墓壙、DY98の土壙1基がある。

この中で、KY23とKY83は同一の溝と推測される。平成元年に調査を実施したKY210に接続する可能性が高く、南北の一辺が36mを有する方形状に配された溝である。内部からは17世紀代に位置付けられる岸窯系の香炉や美濃系の擂鉢が出土しており、先の館跡が廃絶した直後に掘られたものであろう。他の溝は最近まで存在したKY17を除けば小規模で蛇行するものが多いことから、小川的なものと考えられる。

墓壙は長方形プランを有する長径2m前後の豊穴で、深さ120cm～150cmを測る。覆土は粘質土に黒色土が混入する擾乱層であり、人工的堆積状況を示している。底辺部に木炭粒が若干含まれているが、遺物は検出されなかった。近世の墓壙と思われる。

以上が近世遺構の概要であるが、これまでの中世遺構から想定すれば、16世紀に失った館跡の堀を江戸時代に入っても使用していたことが判る。このことはⅡ、Ⅲ層内に初期伊万里、古伊万里を含め多量の漆器等が検出されたことからもうかがわれる。その後、自然堆積で浅くなったり堀を埋め戻したのが17世紀後半であり、Ⅰ層、Ⅱ層がこれにあたる。埋め戻し後の遺構は主にKY23、KY83の区画溝で屋敷を形成していたものと考えられる。

## III 検出された遺物

平成2年度の第1次調査と平成3年度の第2次調査で検出された遺物は、中世期の溝跡と奈良時代の遺構を中心にして5,218点が検出されている。この中で主体を占めるのが奈良期に属する遺物群で、全体の90.6%をなす。ここでは検出された遺物を年代順に述べることにする。

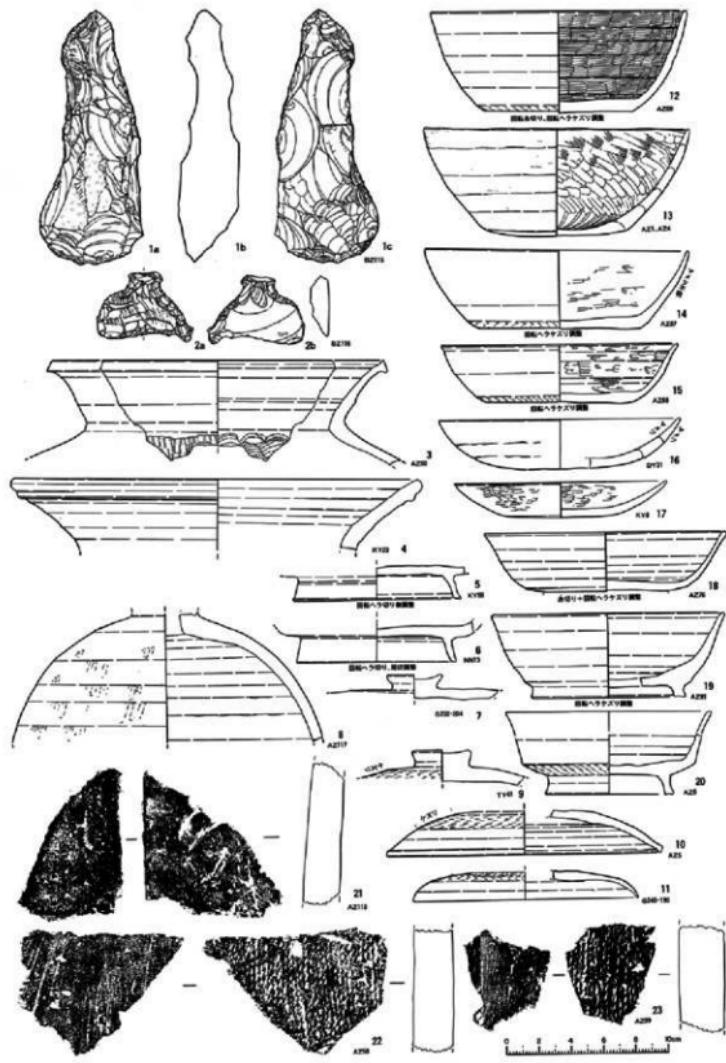
### 1. 繩文期の遺物（第17図1・2）

石器2点が検出された。1は両面加工を示す打製石斧で、再調整を両縁から加えた段階で断念したものである。刃部が弧状を有し、先端が尖状をもつのが特徴であり、刃部は使用によって著しく磨滅している。刃部と先端部の特徴から二夕俣A遺跡、大清水遺跡の両面加工の打製石斧に類似していることから、繩文早期の所産と考えられる。

2は横型の石匙で、a面に主要剥離を施している。b面はツマミ部を中心に線刃加工を行なった程度で、刃部先端にもツマミをもつ。刃部のツマミは再加工の時に付けられたもので、基本的には横型の石匙である。

### 2. 奈良期の遺物（第17図3～23、第18図24～33、第19図34～43、第20図44～51）

土師器を中心に4,728点出土している。大半は破片であり、図化が可能な資料は51点であった。ここでは土師器と須恵器に大別してその概要を述べたい。



第17図 大浦C遺跡出土遺物実測図(1)

・A群土器 [第17図12~17]

土師器の坏類を一括した。いずれも口径が15cmを測る比較的大型の坏類が多く、器形と調整手法により次の4類に細分される。A<sub>1</sub>類土器としたものは、丸底を有するロクロ未使用の壺形土器で、16・17の2点がある。16は輪積痕跡を残し、調整は粗雑である。17は両外面ともに丁寧に横位のミガキを加えたもので、内外とも黒炭化処理を行なっている。笹原Ⅰ期に併行する。

A<sub>2</sub>類としたものは、基本的には丸底であるが、底部に手持ちヘラケズリを施している。外面は輪積痕を残し、ナデを加えたのみであるが、内黒は斜位のヘラ調製とミガキを行なって、炭化処理を示している。笹原Ⅰ期に属するものである。13が概当する。

A<sub>3</sub>類としたものは、回転糸切り後に同じく回転ヘラケズリ調整を行なった坏類で、12・14の2点が検出されている。器高が高く、底面が幅広で胴部が孤状を有するのが特徴である。外面はロクロ痕跡を残しているが、内面は密にヘラミガキを呈する。底辺部も回転ヘラケズリで調整を行なっている。笹原Ⅱ期の特徴をもつ。

A<sub>4</sub>類はA<sub>3</sub>類を短くした様な坏類である。口辺部が幾分外反するのを特徴としている。笹原Ⅲ期に相当する。15が概当する。

・B群土器 [第17図5・6・17~20]

須恵器の坏類を一括した。高台を中心に5点ある。坏の形態から分類すると、器高の低い糸切り回転ヘラケズリ調整をもつ坏、18のB1類。外反気味で高台を有する坏、19のB2類。外反する口縁部が胴部で「く」の字状に折れ、胴部が陵線をもつわゆる陵境のグループ、5・6・20のB3類の3つに分けられる。これらは笹原Ⅰ期からⅡ期に位置付けられる。

・C群土器 (第17図7・9~11)

須恵器の蓋を一括した。中央部が凸状を示すツマミを持ち、背面に回転ヘラケズリ調整を施した器高の高い蓋類である。笹原Ⅱ期の蓋類に多い。

・D群土器 (第17図8)

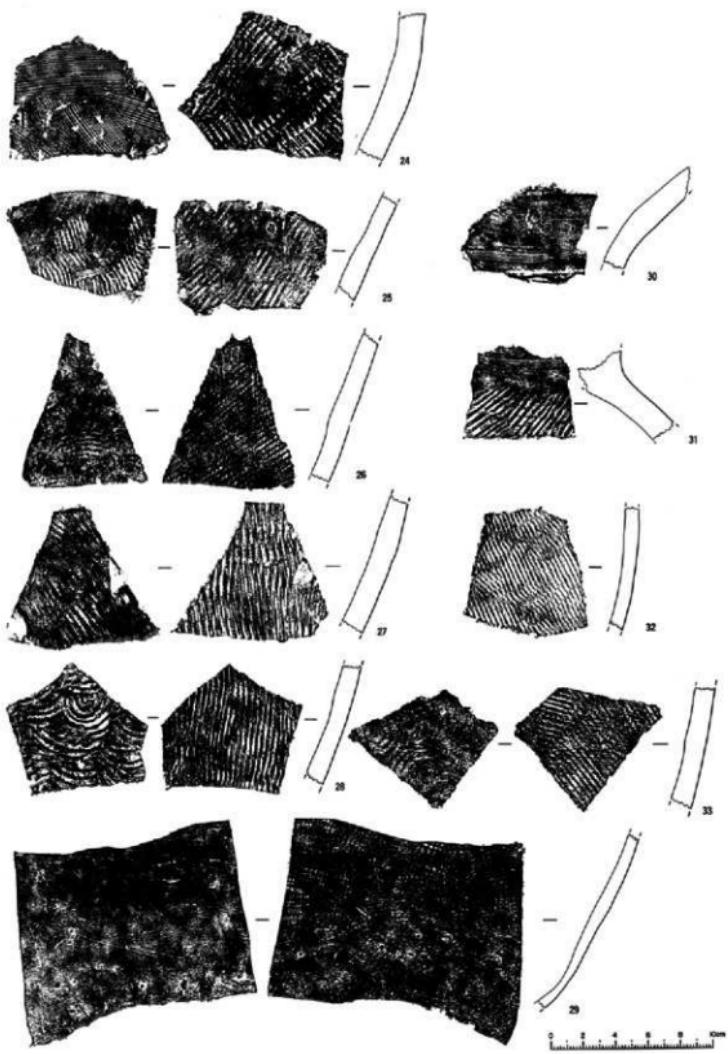
須恵器の壺である。胴部片であり、全体の器形は不明であるが、長頸を有する壺とみられる。

・E群土器 (第17図3・4、第18図24~33、第19図34~43、第20図44~51)

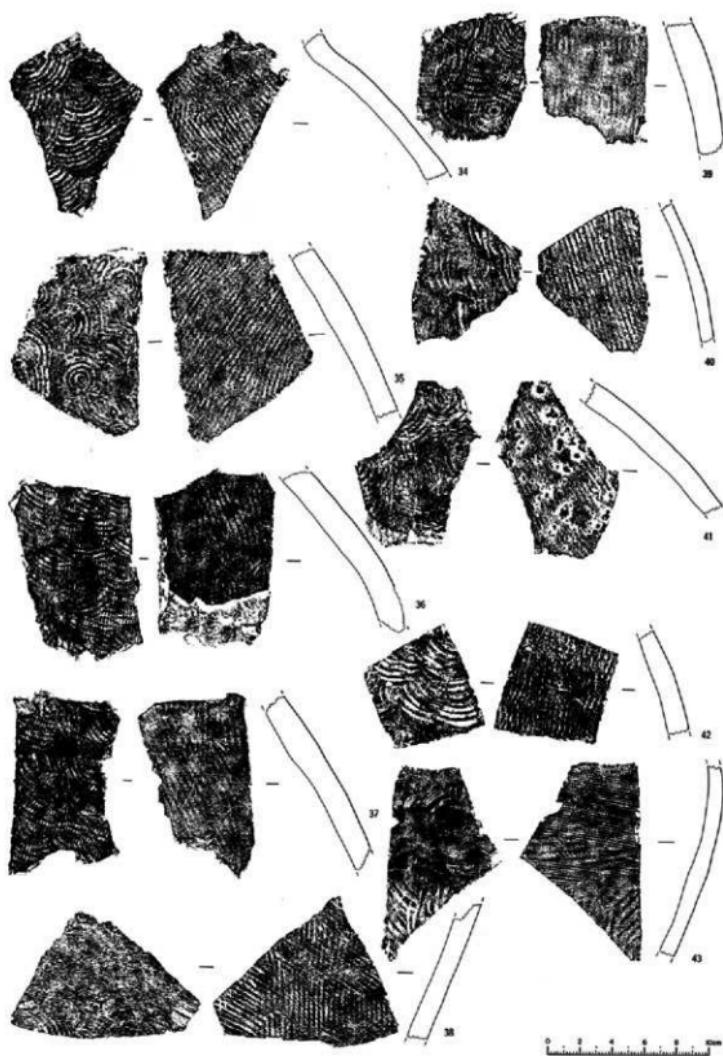
壺形の須恵器を一括した。すべて破片であり、明確にできないが、口縁部が外反し、すぐに胴部に向うものと頸部が直角に立ち上る2者が含まれている様である。外面を板目状の叩き目、内面は青海波を主体とする押え目を有するものと、小円窪を押え目とするものが大半であった。その他としては内部調整にカキメを施した29、43もみられる。

・F群土器 (第17図21~23)

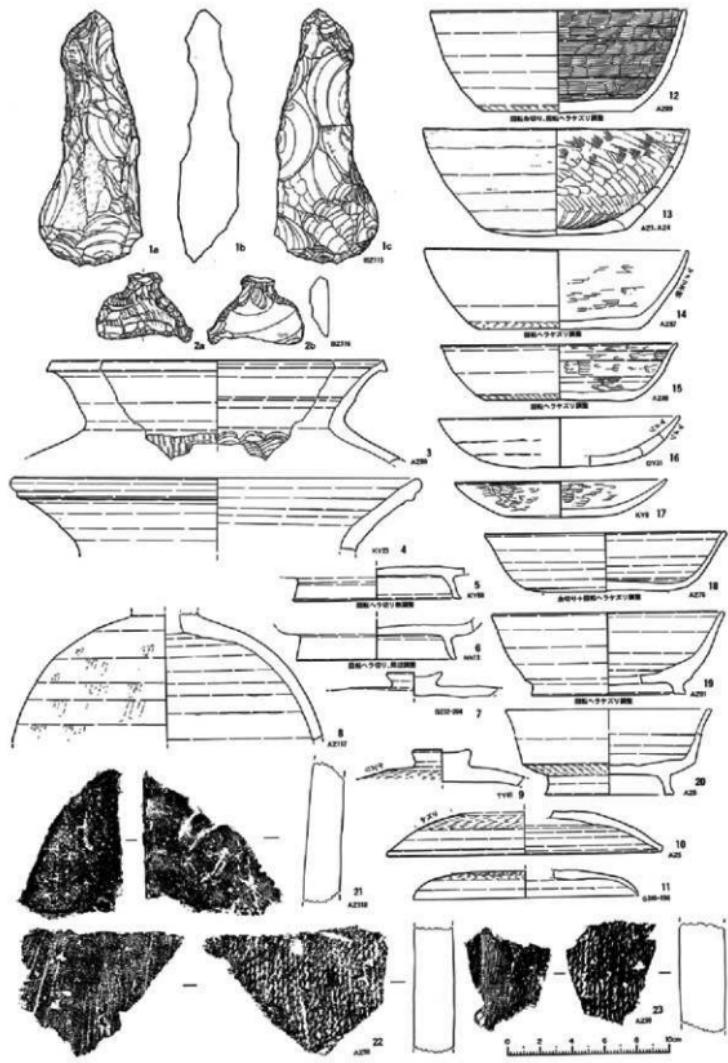
布目瓦を一括した。3点検出している。外面を撚糸、内部に細い布目を施すもので、いずれも少破片である。



第18図 大浦C遺跡出土須恵器拓影(1)



第19図 大浦C遺跡出土須恵器拓影図(2)



第17図 大浦C遺跡出土遺物実測図(1)

・A群土器 [第17図12~17]

土師器の壺類を一括した。いずれも口径が15cmを測る比較的大型の壺類が多く、器形と調整手法により次の4類に細分される。A<sub>1</sub>類土器としたものは、丸底を有するロクロ未使用の焼形土器で、16・17の2点がある。16は輪積痕跡を残し、調整は粗雑である。17は両外面ともに丁寧に横位のミガキを加えたもので、内外とも黒炭化処理を行なっている。笹原Ⅰ期に併行する。

A<sub>2</sub>類としたものは、基本的には丸底であるが、底部に手持ちヘラケズリを施している。外面は輪積痕を残し、ナデを加えたのみであるが、内墨は斜位のヘラ調製とミガキを行なって、炭化処理を示している。笹原Ⅰ期に属するものである。13が概当する。

A<sub>3</sub>類としたものは、回転糸切り後に同じく回転ヘラケズリ調整を行なった壺類で、12・14の2点が検出されている。器高が高く、底面が幅広で胴部が孤状を有するのが特徴である。外面はロクロ痕跡を残しているが、内面は密にヘラミガキを呈する。底辺部も回転ヘラケズリで調整を行なっている。笹原Ⅱ期の特徴をもつ。

A<sub>4</sub>類はA<sub>3</sub>類を短くした様な壺類である。口辺部が幾分外反するのを特徴としている。笹原Ⅲ期に相当する。15が概当する。

・B群土器 [第17図5・6・17~20]

須恵器の壺類を一括した。高台を中心とする5点ある。壺の形態から分類すると、器高の低い糸切り回転ヘラケズリ調整をもつ壺、18のB1類。外反気味で高台を有する壺、19のB2類。外反する口縁部が胴部で「く」の字状に折れ、胴部が腹線をもつわゆる腹境のグループ、5・6・20のB3類の3つに分けられる。これらは笹原Ⅰ期からⅡ期に位置付けられる。

・C群土器 (第17図7・9~11)

須恵器の蓋を一括した。中央部が凸状を示すツマミを持ち、背面に回転ヘラケズリ調整を施した器高の高い蓋類である。笹原Ⅱ期の蓋類が多い。

・D群土器 (第17図8)

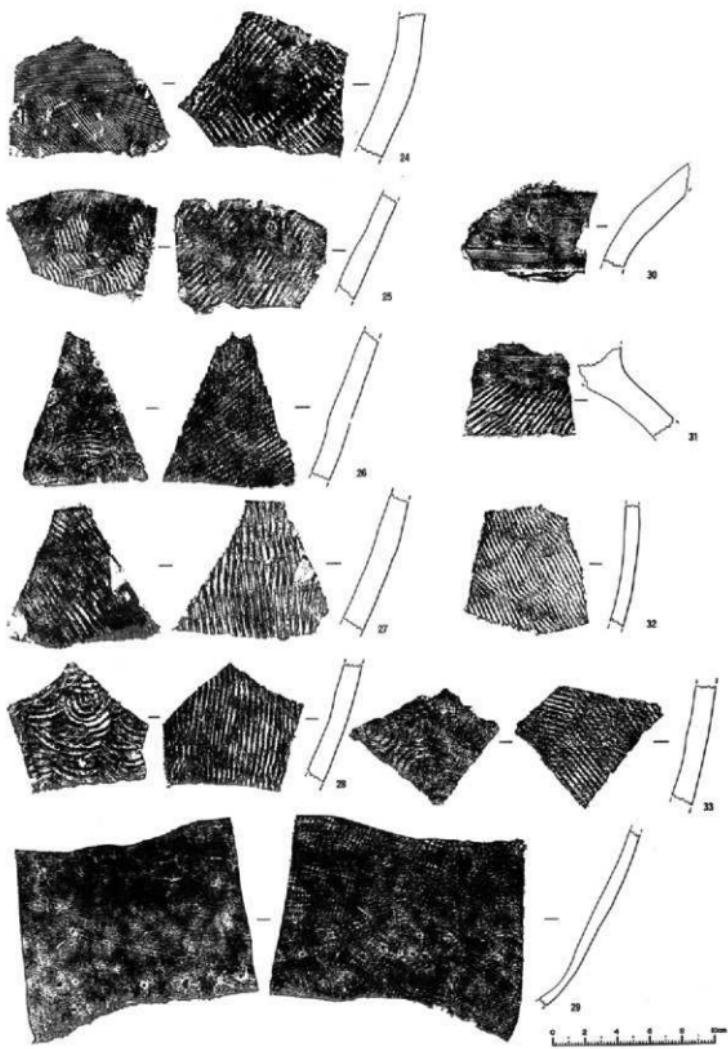
須恵器の壺である。胴部片であり、全体の器形は不明であるが、長頭を有する壺とみられる。

・E群土器 (第17図3・4、第18図24~33、第19図34~43、第20図44~51)

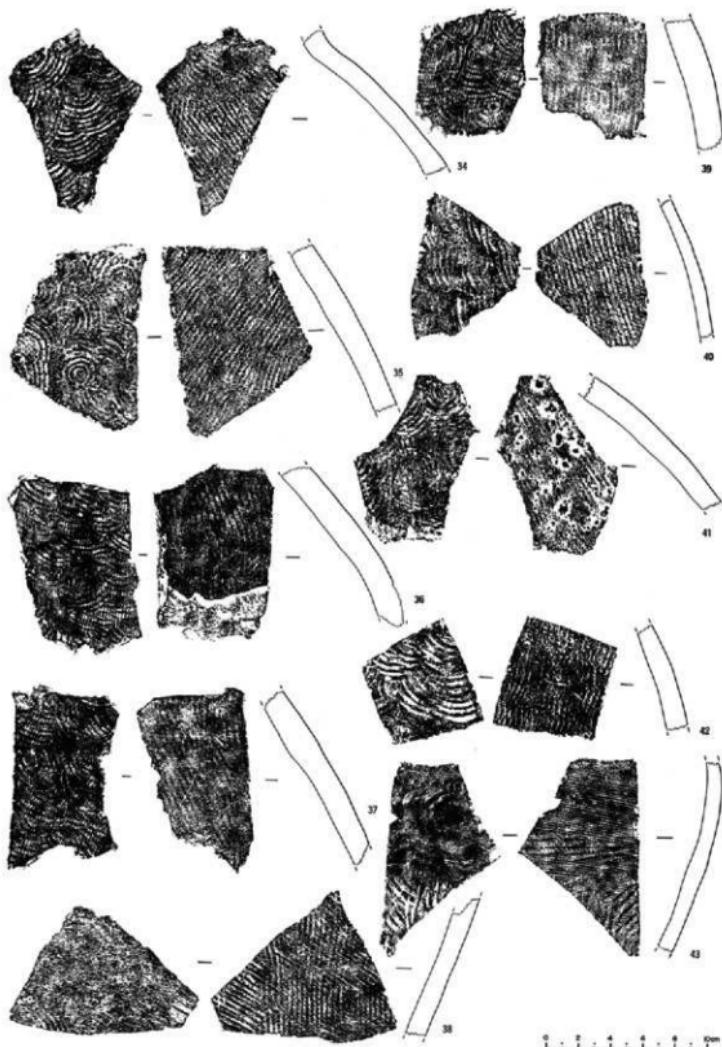
変形の須恵器を一括した。すべて破片であり、明確にできないが、口縁部が外反し、すぐに胴部に向うものと頸部が直角に立ち上る2者が含まれている様である。外面を板目状の叩き目、内面は青海波を主体とする押え目を有するものと、小円窪を抑え目とするものが大半であった。その他としては内部調整にカキメを施した29、43もみられる。

・F群土器 (第17図21~23)

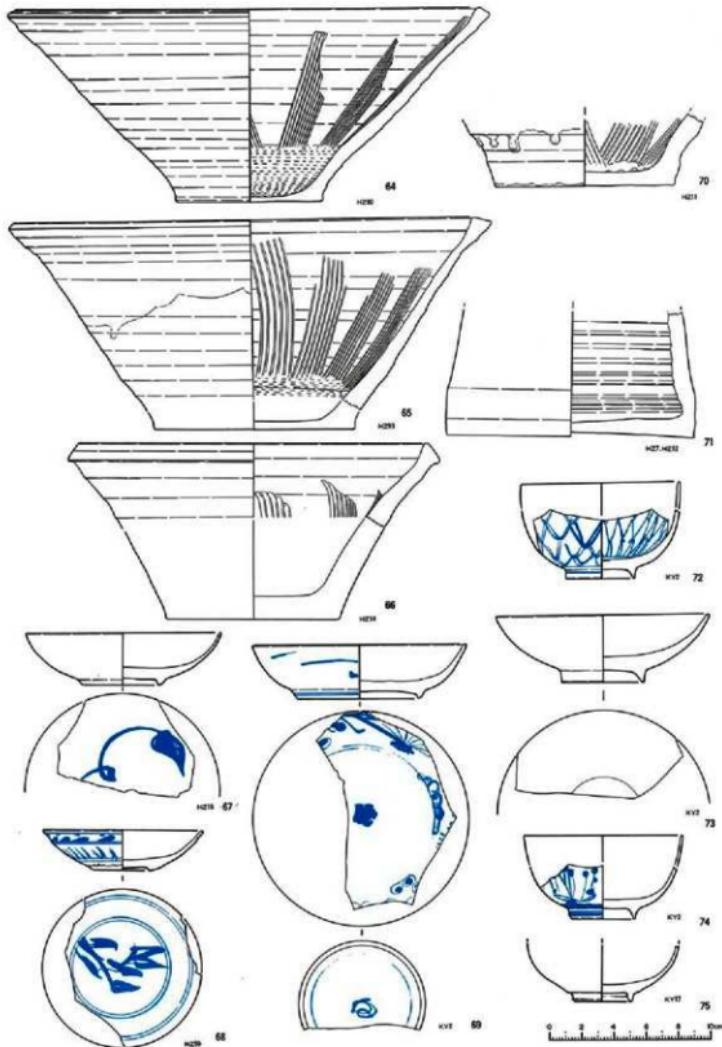
布目瓦を一括した。3点検出している。外面を撲糸、内部に細い布目を施すもので、いずれも少破片である。



第18図 大浦C遺跡出土須恵器拓影(1)



第19図 大浦C遺跡出土須恵器拓影図(2)



第23図 大浦C遺跡出土遺物実測図(4)

褐色を呈している。成品は福島県飯坂町の岸窯系と考えられ17世紀前半頃とみたい。

・e磁器（第23図67～69・72～75）

染付を有する碗、小皿、盃を一括した。碗は3点あり、72は鮮かなコバルト発色を呈し、内外面ともに網目文様をもつ。74は暗青黒色の呉須を用いたもので、草花を描いている。75は薄緑色の釉を施すもので相馬系の碗とみられる。72は古伊万里、74は初期伊万里に属する。

皿は3点ある。67は薄灰色の粗地にカタクリ葉を暗青黒色の呉須で描いている。68は薄青白色釉に暗青黒色の呉須を用いて、松葉様文と水滴様文、底に水草様の文様を施している。69は松枝と雲型文、草花を構成したものである。いずれも初期伊万里系と考えられるが、68に関しては搬入陶器「明」とみられる。

3) 木器（第24図・第25図・第26図）

KY2のⅢ～Ⅳ層とKY88の最下層より検出されたもので、漆器、木製用具、下駄等がある。ここでは器種ごとに触れる。

・a椀類（第24図76～81、84～88、91～94）

44点出土しているが、図化可能は15点であった。この中には漆器で染付を有する78～80、84～87と、染付をもたない81～88・91～94、粗地椀の3種類がある。いずれもⅢ～Ⅳ層内から検出されたものであり、江戸前半（17世紀～18世紀）に位置付けられる。

・b木製用具（第24図82・83・89・90・95・96、第25図101）

7点ある。82は直径11cm、高さ7.5cmの曲物、89は刀子型の箆状木器、90・95は木箆、96は樽の底板、83はムシロ等を編む際に用いられた「こもつづろ」とみられる。101も底板で82の様な小型の曲物に伴うものと考えられる。

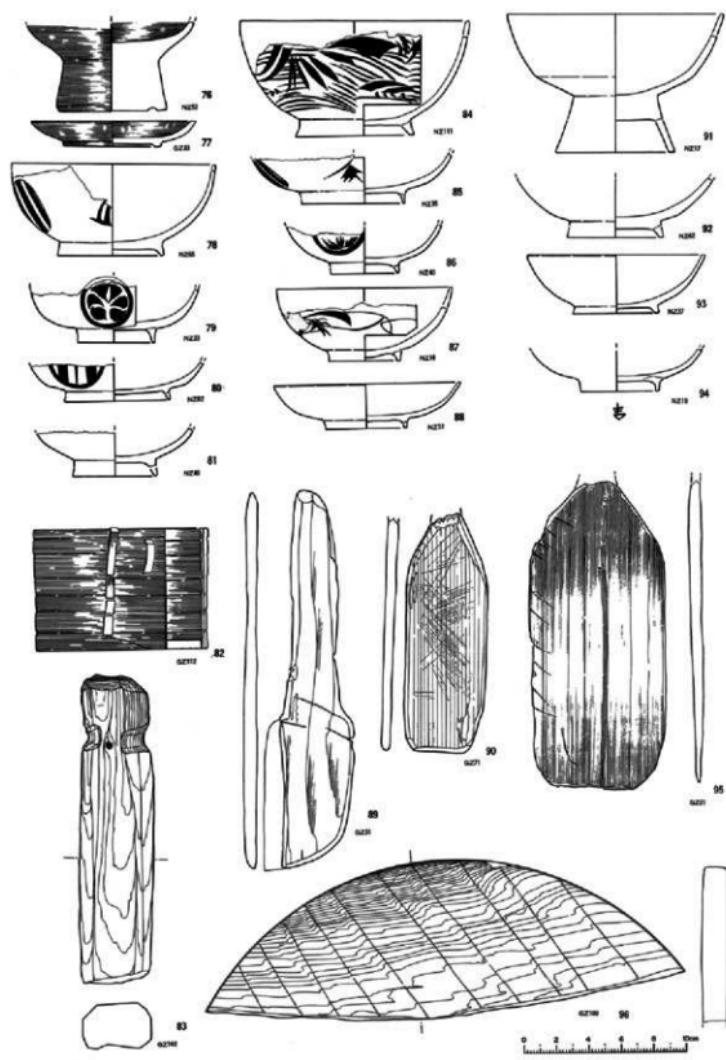
・c下駄（第25図97～100、第26図102～104）

下駄の仲間を一括した。これらは齒を差し込んだ差歎下駄と連歎下駄の2種類が検出されている。差歎を有する下駄は3点あり、脇穴を1単位とする97と103の他に脇穴2単位をもつ104がある。材質は身が杉、歯は栗である。

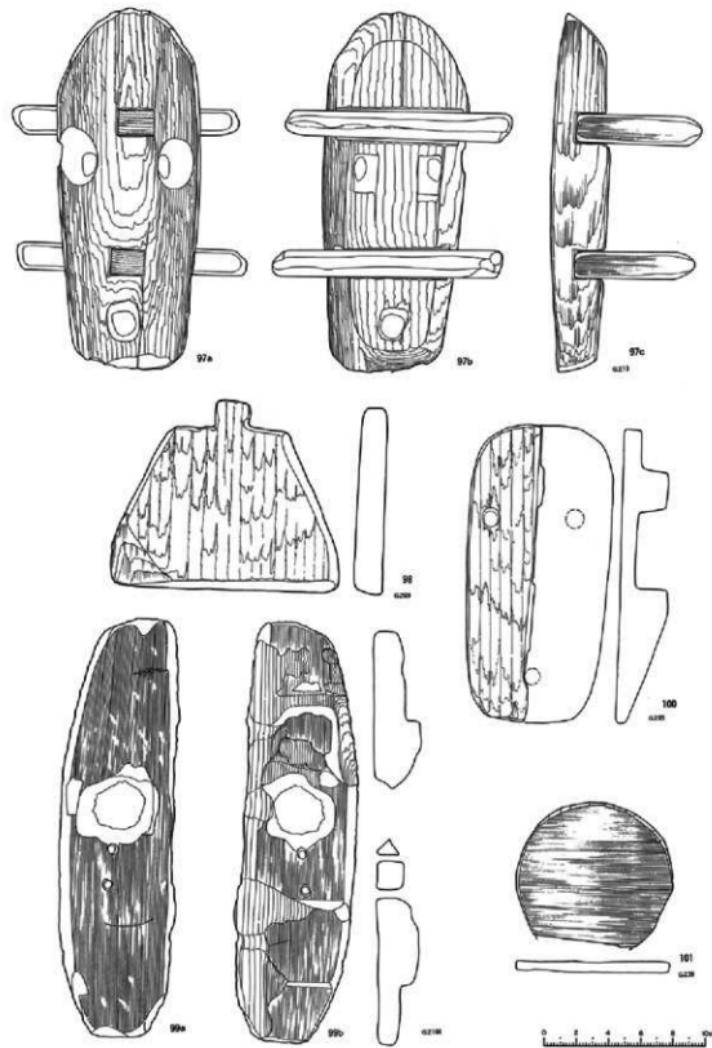
連歎も3点あり、100は前歙が斜状をなし、99は中央に不自然な穴を有することから農具に転用したとみられる。102は厚味をもつ歙で足駄的な感を受ける。

4) 古銭（第26図105～111）

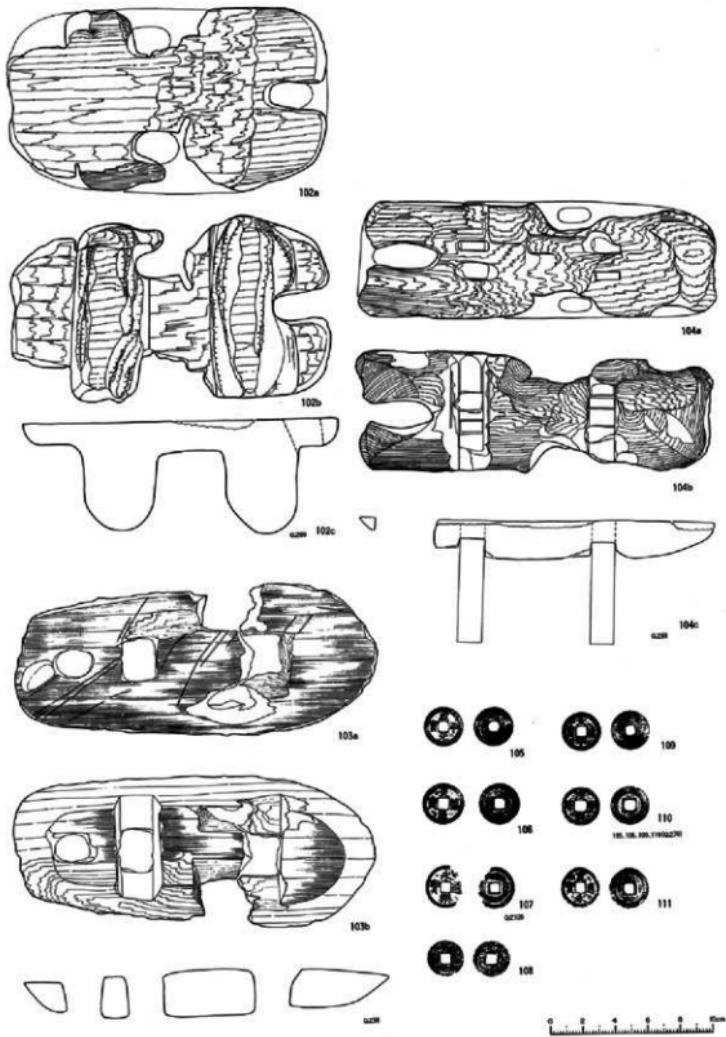
KY18とグリッドより7枚出土している。105の咸平元宝（998）、106の天禧通宝（1017～1021）、109の太平通宝（976）、110の元豐通宝（1078）の4枚が宗銭であり、107の永樂通宝（1408）が明銭、108と111が寛永通宝である。この中で宗銭4点はKY18の底面にまとめて検出されたものであり、注目される。



第24図 大浦C遺跡出土遺物実測図(5)



第25図 大湊C遺跡出土遺物実測図(6)



第26図 大浦C遺跡出土遺物実測図(7)

## IV 総 括

第1次調査と第2次調査の成果について要約する。大浦Cを含む大浦遺跡群は昭和59年の第I次調査から今年度までの調査で10回を数えた。平成元年度のⅣ次調査では一辺40mを有する横列で区画された内部に、整然と配置されたⅡ期にわたる建物群が検出され、土壤内から出土した延暦23年の漆紙文書（具注曆）の分析から奈良時代中葉～同末葉期の官衙であることが判った。

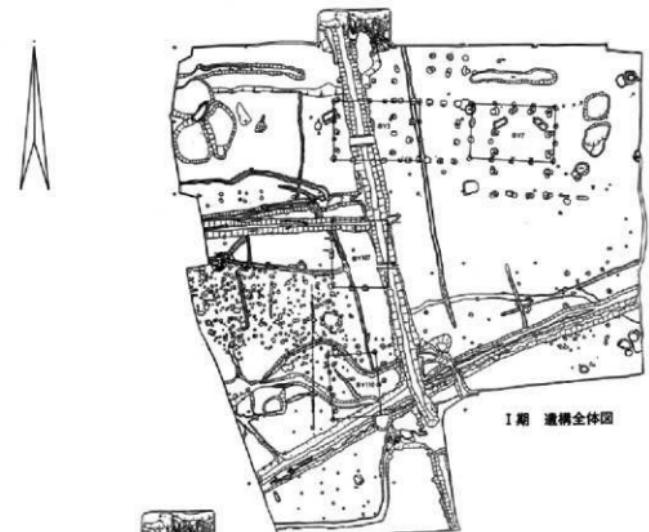
その後、大浦A遺跡、大浦C遺跡の調査の中で、奈良時代の建物跡も発見され、大浦遺跡群全体が官衙域であることが指摘されている。

このことを前提に大浦C遺跡について考えてみたい。奈良時代の遺構は官衙が発見された大浦B遺跡と同様な傾向を示す。旧KY88は断面の観察で3時期に区分される。後で中世の堀も切り合っていることからすれば4期であり、仮に古い順からKY88a-dとすれば、南よりa. b. cの順で掘られていた。この溝は昭和59年の調査でKY2としたものであり、上部が削平されていたため、2時期しか確認していない。KY88aの覆土には丸底の甕を主体とした遺物が出土し、b. cも丸底にケズリを有する甕が出土していることから判断すれば、8世紀前半から中葉頃に位置するものと考えられる。覆土のⅠ層とⅡ層は粘土と黒土を混合した版築層で、意図的に埋められたと推測される。同じことは大浦B遺跡の遺構でも確認されており、官衙以前に存在していた堅穴住居跡を意図的に埋め、官衙を構築していることが判った。その年代は8世紀中葉で、大浦C遺跡の年代とも一致する。大浦B遺跡に照らし合わせればⅠ期となる。そして、大浦B遺跡では3棟の大規模建物跡を中心とした官衙が成立するのがⅡ期であり、大浦C遺跡のBY3、BY7、BY107、BY110の4棟の建物が「L」字状に配された時期である。

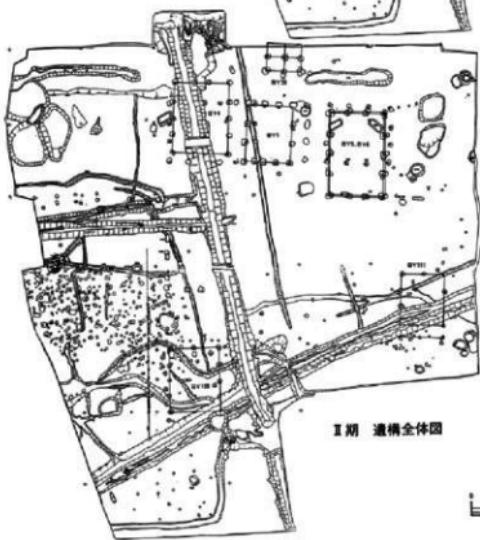
Ⅲ期に入ると大浦B遺跡では先のⅡ期の建物をすべて建て替えし、新たな官衙を構築する。これが大浦C遺跡のⅡ期の遺構群で、7棟の建物を「コ」の字状に配置した。ここで注目されるのは、大浦B遺跡で最初に成立した官衙内の建物は10棟（調査区内での棟数）であったのに対し、次の新築した官衙内には10棟の他に、横列外に2棟ができ、規模が拡大していることである。大浦C遺跡も同じ様に、Ⅰ期は4棟で構成していた建物群がⅡ期に入ると7棟に増加している。このことは初期の官衙が年代とともに拡張した（周辺整備が急速に拡大した）ことを意味するものである。この大浦B遺跡のⅢ期が8世紀後半から末葉で、大浦C遺跡のⅡ期に符合する。

また、今回のⅠ期、Ⅱ期の建物跡の西側に接して、ON109の横列が一部確認されており、調査区の北側と南側が、開田の際に削平されていることを考慮に入れれば、建物群を区画していた公算が強いものとみられる。

次に池状遺構としたNN11～13と土壤、KY8、KY14の2基の溝であるが、大浦B遺跡のⅣ期の遺構にも同様な施設が伴う。覆土に多量の木炭と焼土、遺物を含むのが特徴で、大浦B遺跡の官衙が廃絶（移転）した直後の遺構と考えられ、移転に伴う解体、残務整理の際に古材等を焼却処理したものとみられる。同じ様に大浦C遺跡でも行なわれたことを証明するものであり、今回の



I期 遺構全体図



II期 遺構全体図



第27図 大浦C遺跡遺構全体図



第28図 大浦B遺跡遺構全体図

大浦C遺跡のⅡ期にわたる建物群が官衙に付随することを示唆するものもある。

大浦B遺跡の施設は現在のところ奈良時代の置賜郡衙とみるのが有力である。南に4脚門を有する南北39m、東西46m? の柵列で区画された建物群は郡衙の郡庁もしくは正倉と推測されている。郡庁は正殿と呼ばれる大規模な建物を中心にして構成されるが、大浦B遺跡の場合、Ⅱ期のBY 1～BY 3とⅢ期のBY 8、BY 19、BY 9の3棟を隣接させて正殿的な施設としている。

従って、この3棟を含め倉庫とする正倉院の考え方も成立する。今後の調査において、いずれ明確となろうが、郡衙内にはその他にも「厨」、「馬屋」、「郡寺」等の施設が伴うことが知られている。今回の大浦C遺跡で検出された建物群はそれらのいずれかに相当するものであろうが、建物の規模や配置状況からすると「厨」の可能性が有力と思われる。大浦遺跡群は先述した様に大浦A～D遺跡で構成されている。大浦B遺跡からは郡庁もしくは正倉が検出し、A遺跡からは建物跡と外周を区画する柵列が発見され、東端の大浦C遺跡からは厨機能をもつ遺構群が検出された。郡衙と推測される遺跡は全国でも20数箇所を数えるが、郡庁、正倉、厨等全体像を確認した例は数少なく、大浦遺跡群の存在は重要である。最後に2回にわたる調査において、様々な面でお世話をなった地主である速藤庄四郎氏に感謝を申し上げ、現段階のまとめとする。

# 特 別 寄 稿

草 刘 広 一

## 〈大浦C遺跡から出土した昆虫遺体〉

発掘作業中に、溝跡（KY2）から數種類の昆虫化石（遺体）が出土した。

それらの鑑定は、中根猛彦博士の指導を得ながら、筆者が行なった。

出土した昆虫遺体の種類として、まず「ガムシ」と「マークオサムシ」があげられる。これは水田もしくは泥炭性の池沼の存在が考えられるが、泥炭性の池沼のような生息環境では「マークオサムシ」より個体数の多いと思われる「アカガネオサムシ」が得られていないので、水田が近接していた可能性が高い。「マークオサムシ」は、以前は置賜地方の水田地帯に生息していたようであるが、昭和40年頃から激減し、南陽市の白竜湖での昭和53年の記録（泥炭層中に保存された遺体）を最後に、得られていない。（「アカガネオサムシ」は現在でも健在である）

「スジコガネ属」の多いことや、「マメコガネ」、「オオゴミムシ」、「ツノアオカムシ」が得られていることは、昭和59年に発掘調査された「上浅川遺跡」と共通しており、両者は類似した環境であったことが想像できる。動物の死体や糞に発生するウジなどを捕食する「エンマムシ」類も得られており、家畜の糞に依存していたことも考えられる。「キクビアオアトキリゴミムシ」は樹上性であるが、河原の植生の根ぎわなどでも見つかっている。前述の上浅川遺跡と異なり、山地に近接していない大浦C遺跡でも、「ツノアオカムシ」などが出土していることから、置賜盆地の各地で現在も見られるような用水路沿いの樹種の豊富な林、あるいは豊かな屋敷林の在存が考えられる。

### 【出土した昆虫遺体】

KY2 F 6 (14世紀後半)

マークオサムシ（両上翅）、ガムシ（右上翅）、スジコガネ属の一種（上翅細片多数）緑色のものが多いが、紫色のものもあり、ヒメコガネも含まれていると思われる。

KY2 F 5 (15世紀初)

ヤマトエンマムシ（前胸）、マメコガネ（前胸）本種と思われるが、現生種の標本と比較すると、前胸背正中線が明瞭で赤紫色。ヒメコガネ（上翅、約3個体）、不明甲虫（ゴミムシか？）（右上翅）

KY2 F 4 (15世紀末)

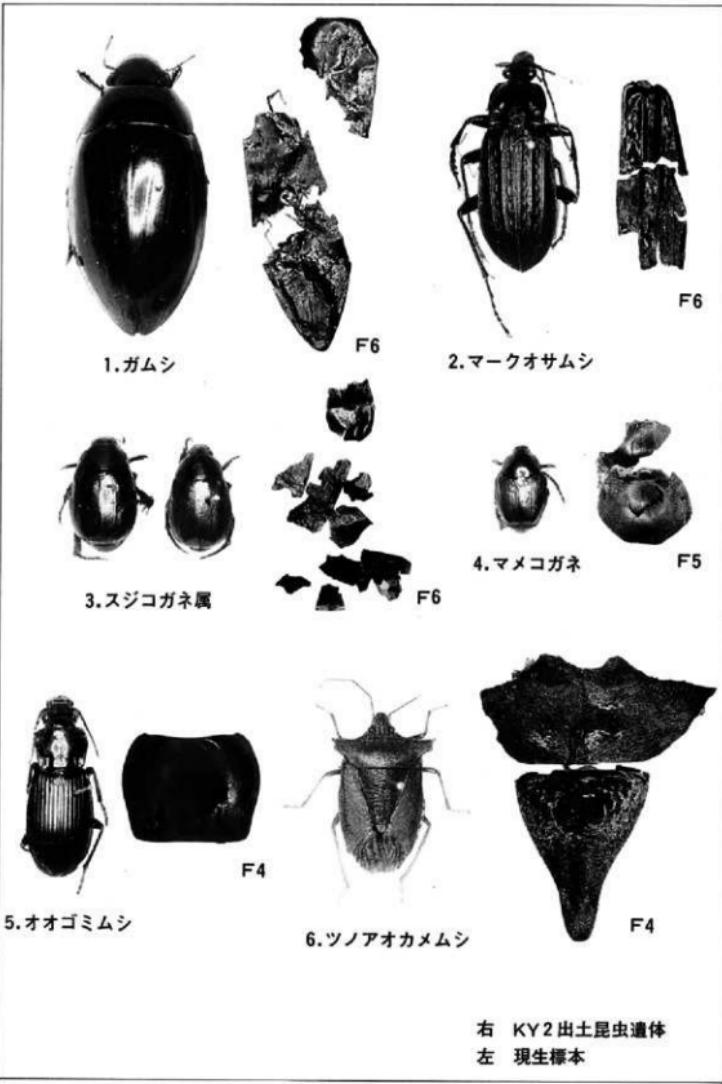
キクビアオアトキリゴミムシ（右上翅）、オオゴミムシ（前胸）、スジコガネ属の一種（上翅細片複数）、ツノアオカムシ（前胸、小楯板）

KY2 F 3 (江戸初期)

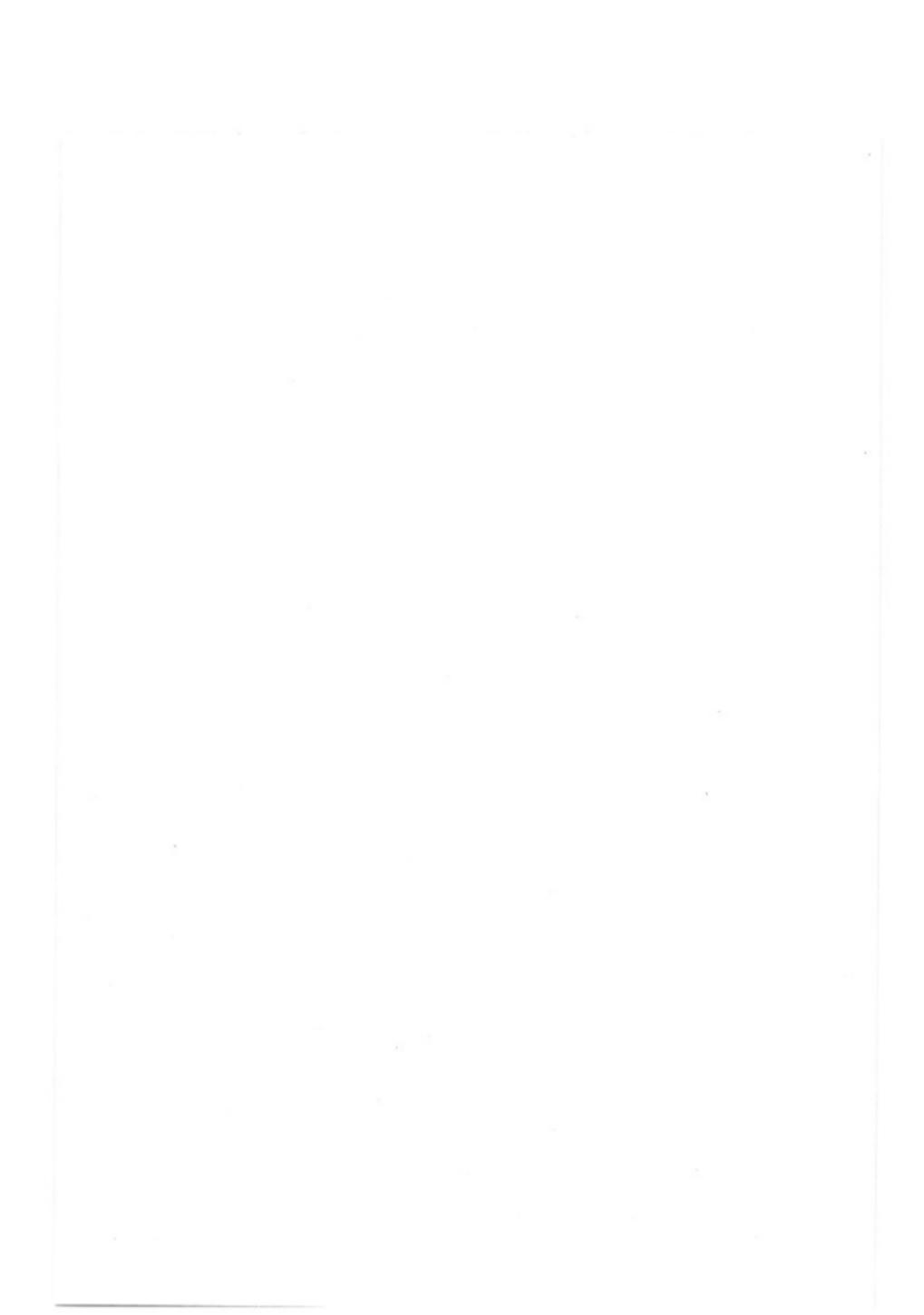
ガムシ（上翅、4個体）

KY2 F 2 (江戸中期)

スナハラゴミムシ族の一種（右上翅）、スジコガネ属の一種（上翅細片複数）、コメツキムシ科の一種（右上翅）



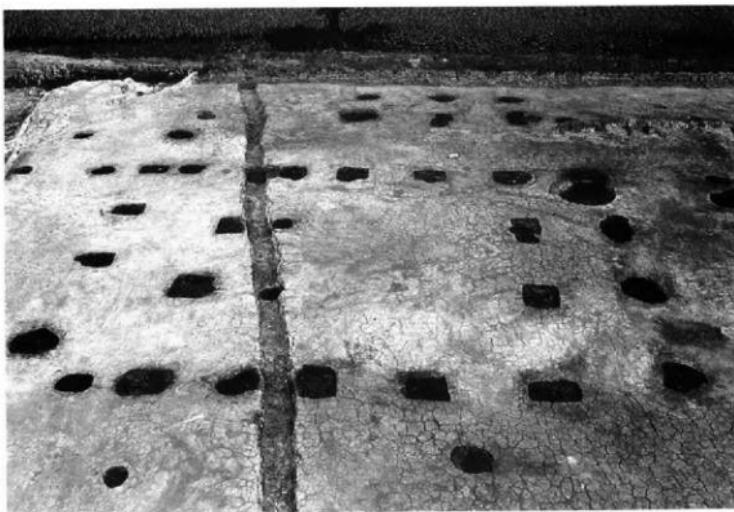
写 真 図 版



第一回版  
大浦C遺跡第一次調査の発掘  
(1)



▲ 捜立柱建物跡全景(西方より望む)



▲ 捜立柱建物跡BY1近景(南方より望む)

第二回版  
大浦C遺跡第一次調査の発掘  
(2)



▲ KY2 発掘状況(南方より望む)



▲ NN11~13 発掘状況(南方より望む)



▲ KY 88発掘状況(北東より望む)



▲ KY 2とKY 88の交差部分(北方より望む)



▲柱穴群とON 109(北方より望む)



▲KY 88発掘状況(西方より望む)



▲ GZ 108(下牀)出土狀況

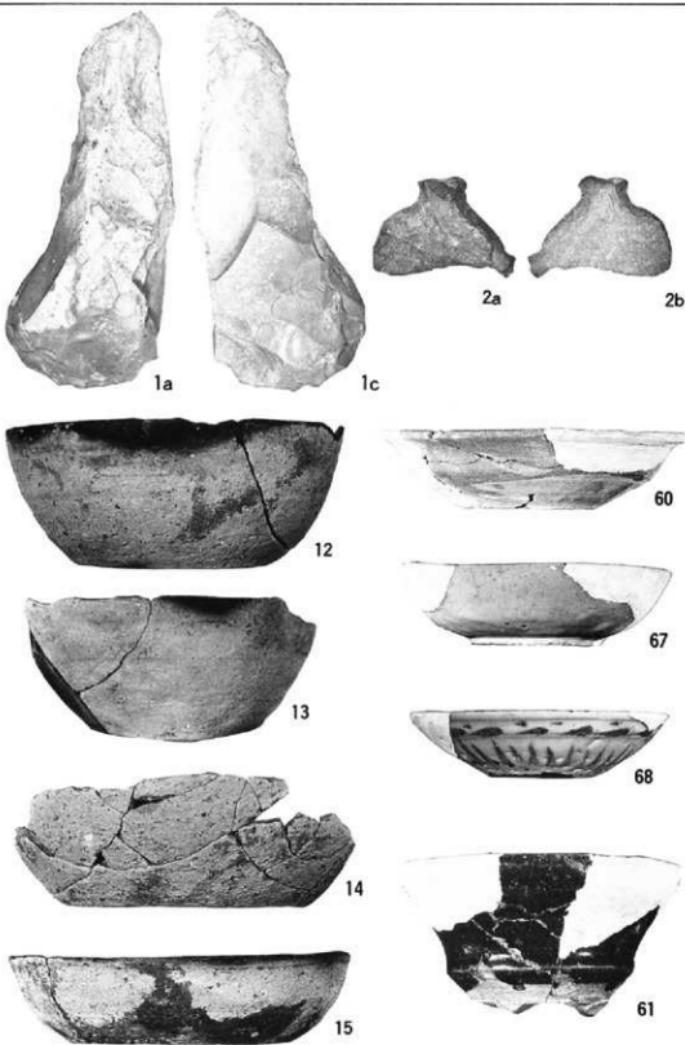


▲ NZ 111(漆器碗)出土狀況

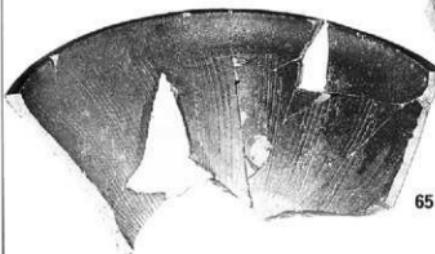


▲ AZ 88(土師器坏)、AZ 89(土師器塊)出土狀況

第六図版  
大浦C遺跡出土の遺物(1)

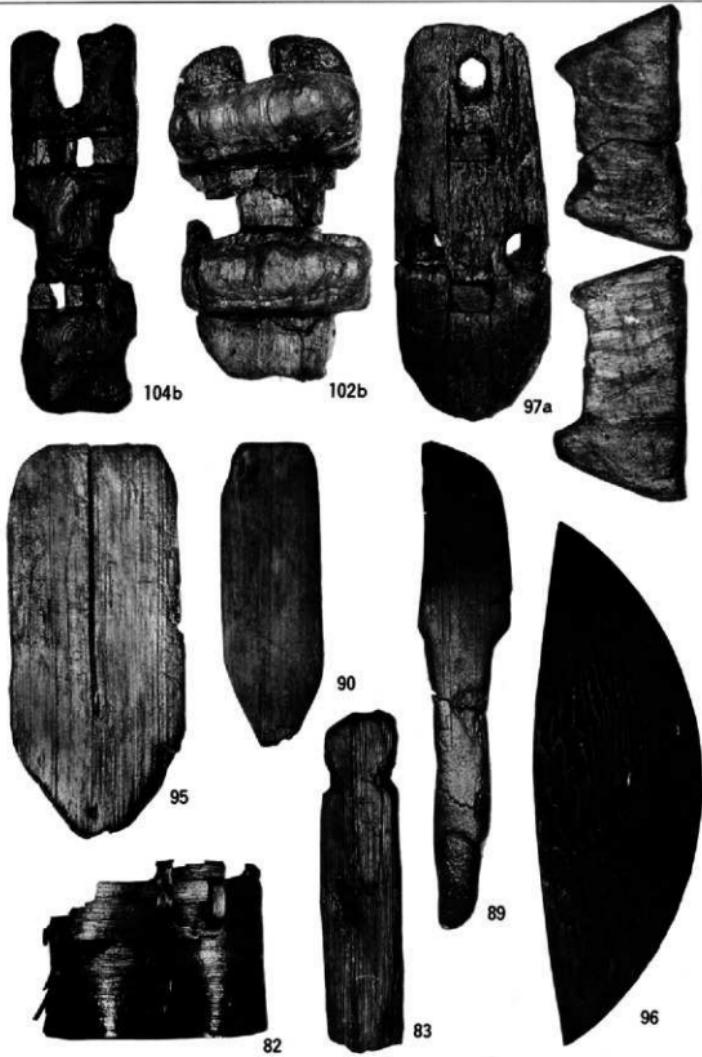


第七図版 大浦C遺跡出土の遺物(2)

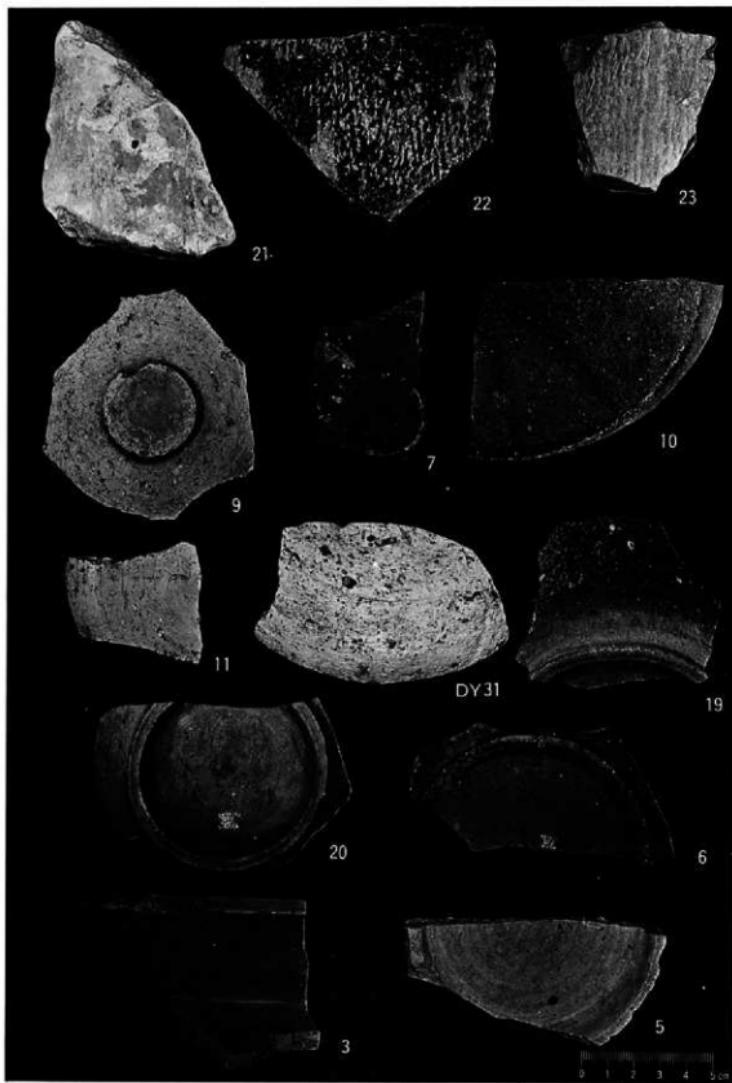




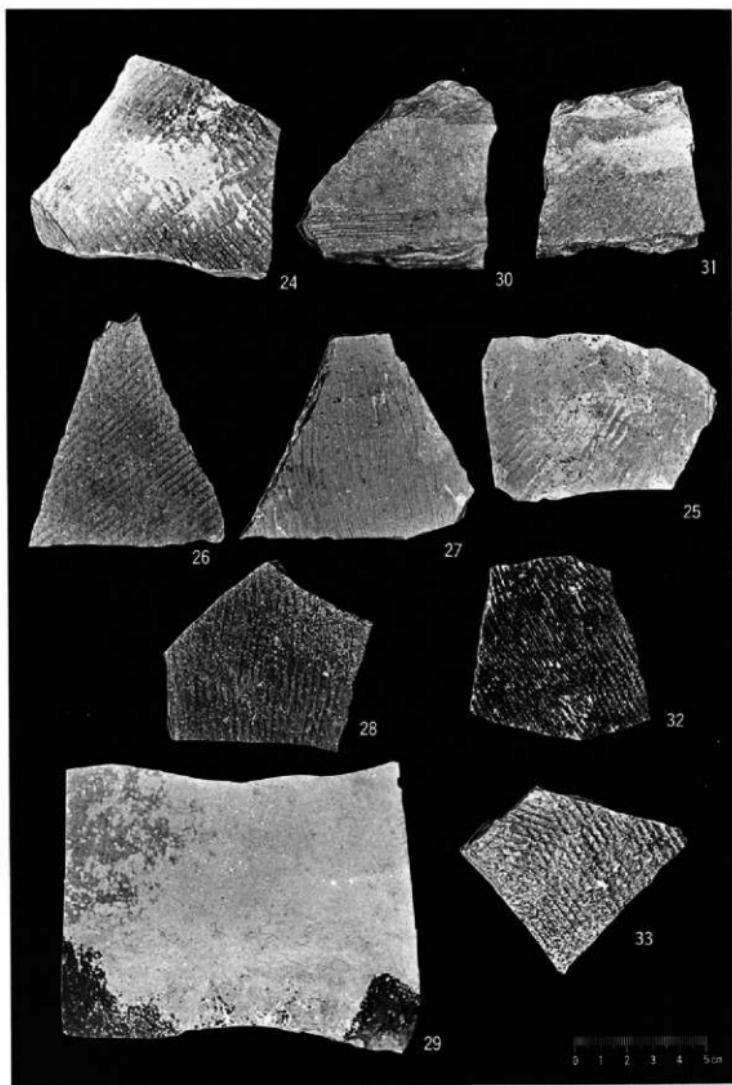
第九図版 大浦C遺跡出土の遺物  
(4)

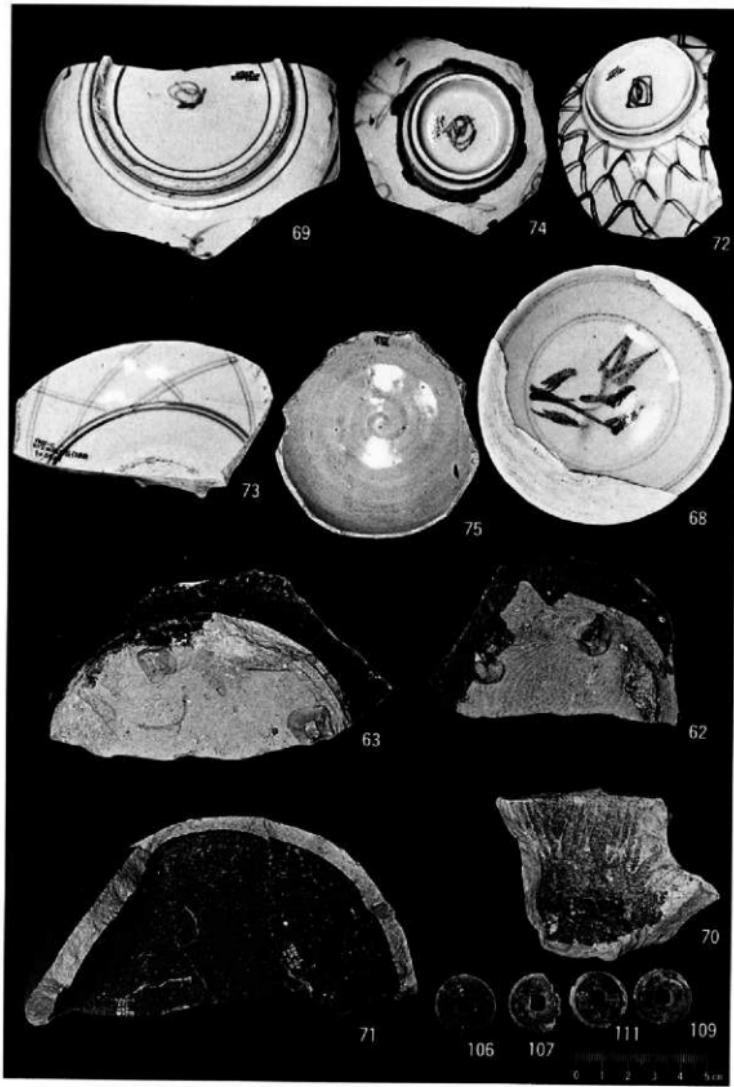


第十図版 大浦C遺跡出土の遺物 (5)



第十一図版 大浦C遺跡出土の遺物  
(6)





米沢市埋蔵文化財調査報告書第33集

## 大 浦

### 大浦C遺跡発掘調査報告書

平成4年3月25日印刷

平成4年3月30日発行

発行 米 沢 市 教 育 委 員 会  
米 沢 市 金 池 五 丁 目 2 — 25  
TEL (0238) 22-5111

印刷 緑 よ ね ざ わ 印 刷  
米 沢 市 城 西 二 丁 目 3 — 72  
TEL (0238) 21-1212

